

【完結】 百五十万人の
新規着任提督は人工鯨
の夢をみるか？

hige2902

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ネタの問題で後編から読むのが正しいです。

予想を遥かに上回る新種の深海棲艦の一撃により戦艦金剛の継戦能力は喪失。無人機による支援の下、提督は乗船した旗艦である戦艦陸奥に殿を務めさせ、轟沈までの短い間に、無人機が主力となっている現代戦争の議論を陸奥と交わす。

人間の死なくなつた無人機による代理戦争は正常か？

法的には物損の人工鯨による自爆戦術に無意識を馳せる陸奥の情感に、提督は物理的

に不可能な哀れみを自然発生させ、かくて魂を駆動させるのか。

目次

第一話 後編 旗艦が沈まない不明瞭な

理由 | 1

第二話 前編 エラーのない日日

22

第三話 終編 前任提督は人工鯨の夢を

みない | 42

第四話 おまけ編 ドキドキおぼんつ大

作戦 | 54

第五話 完結編その一 流れよわが涙、

とサンタは言った | 83

第五話 完結編その二 流れよわが涙、

とサンタは言った | 104

第一話 後編 旗艦が沈まない不明瞭な理由

「提督」

「わかっている、わたしも確認した。新種だな」

わたしは隣で焦る陸奥が見た標的を、艦橋の望遠鏡でも確認した。目視はようやくやくだつた。

朱に染まる海上で、鉛色の有機的とも無機的とも取れる物物しい兵装に、白い人型が一体化していた。赤い揺らめきが顔を——おそらく眼を——爛爛とたぎらせているようだった。

「人に見える、性別はおそらく女性。大きさは他の深海棲艦と変わらないようだが。駆逐艦雪風に情報伝達。以降、観測対象を戦域から新種の深海棲艦とせよ」

陸奥は空に語るように、わたしの伝言を一言一句の誤りもなく発した。それで艦どうしの連絡が取れるらしいのだから便利なものだ。

わたしには二つの選択肢があつた。このまま敵の増援を迎え撃つか、それとも撤退するか。

すでにわが艦隊は一戦交えており、被害は軽微ながらも弾薬や燃料はそれなりに消耗している。しかし敵の増援は当方六隻に対したつた一隻である。彼我の距離も乱れた艦隊陣形を整えるのには十分であり、数の利による集中砲火で迎撃しても良い。その際の新種の行動原理や保持火力などの性能情報を観測すれば今後の役に立つのだが。

気になるのはなぜ敵が一隻で挑んできたのか。人型であることからある程度の思考能力はありそうなものではあるが、だとすればわざわざ多勢に無勢の戦況に挑むのは誤りである。もつとも、新種がそれを覆すほどの戦術戦闘能力を保持していれば別だが。そう思考していた。海上、新種が赤色に発光したと目で捉えた瞬間に閃光が走る。わたしが乗る艦のすぐ横を抜けた。

陸奥がわたしに状況を伝える。「戦艦金剛、大破」

遅れてやってきた衝撃波で艦が揺れた。

「全艦に情報伝達。戦艦陸奥を除きこの戦闘海域から急速離脱。戦艦陸奥は敵新種と交戦、可能な限り時間を稼ぐ。駆逐艦雪風は当艦との情報伝達可能距離ぎりぎりまで待機、情報収集に徹し、しかる後に当初の帰還航路で味方護衛艦と合流しラバウル基地に帰還せよ」

「情報伝達終了。戦艦金剛より情報伝達、援軍要請は？」

「不要。敵新種の戦術戦闘能力は生半可な戦力では太刀打ちできないと思われる。万一

のため、基地の防衛に徹せよ」

幸いに金剛の動力推進は停止していなかった。

五隻の艦が海に白い軌跡を描いて撤退してゆく。わたしたちを残して。

「届かないよな、主砲」と、わたし。わかりきった質問でスキツトルのウイスキーを一口やった。

「距離に関しては問題ないけど、命中するかどうかは保障しない」

「第二射が来ないといいのだが……敵主砲の装填速度も記録しておく必要があるな」

「勝算はあるの？」と、陸奥。挑発的に腕を組み、ニヒルに笑って言った。

「ない。悪いが戦艦陸奥はここで沈む。目標に対し主砲一斉射撃」

陸奥は試すような笑みでわたしを見据えたまま、艦の主砲を旋回させ、砲撃した。砲撃手などいない、水夫も。膨大な人員が必要なはずの戦艦にいるのはわたしと陸奥のみだった。

砲弾は放物線を描き、遠方で大きな水柱を作る。

「当たらないと言ったでしょう」

「海底まで後生大事に取っておくのももつたいたい。当たる確率もゼロではない」

「それもそうか。でもわたしを捨て石にするのだから、それなりの戦略的意義があつてほしいものね」

「ないわけではない」

わたしはもう一口だけ酒をあおって、スキットルを陸奥に渡した。

対人類体。後に名づけられた深海棲艦による各国の領海侵犯はほぼ同時に起き、排他的経済水域は曖昧になった。

日本も当然、例外ではなかった。日本海軍は深海棲艦の持つ特性により無力化されたといつてもよく。本土は北海道、四国、九州との海路、海底トンネル、橋の移動手段を失った。

この劣勢をどのように挽回したかというと、嘘のような話かもしれないが、呉に建築された大和ミュージアムへ改修に展示してあるレプリカが動き出して深海棲艦を撃退した。本当かどうかは、知らない。

数年前、人類史上初の深海棲艦を追い払った戦艦大和のレプリカが一人の女性によって操作されていることがわかったのは、甲板に仁王立ちしていれば当然といえば当然だった。

彼女は人間とのコミュニケイトツールとしての媒体らしい。その大和が言うには、

自分はWW2からの母国を守るといふ執念が時を無視して具現した存在らしい。執念はそれ単体では当然に物理的干渉を行えず、したがって現実へと具現するには執念の

抛り所、それも関連性があり、執念の体言実行を可能とする媒体がいる。それが軍艦。

そして今のレプリカでは力を発揮できない。本物を再現してほしいとのこと。

さらに、本物に似せた艦さえあれば他の艦も顕現するだろうとのこと。政府がこれ信じたのは、ある理由がある。

「敵新種の射程と金剛を一撃で大破まで追いやつた威力と正確な照準がカタログスペースクドおりのものだ」と仮定し、さらに逃げるわれわれと同速度以上で追撃された場合は全滅する」

「そこで最も耐久力のある戦艦で足止めしようというわけ、か」

「今、ラバウル基地主力を失うわけにはいかない。たとえ戦艦陸奥を失っても」

ふうむと、陸奥はあごに手をやり、視線を宙にさまよわせた。スキツトルを左手に握ったまま。

「きみは強力だよ。高性能だ。しかし陸奥を除いた主力の全艦と天秤にかけると、やはりな。強力でも一隻では戦略行動を実行することはできない」

陸奥は被弾面積を最小限に抑えるため、横腹を見せず、目標に対しての砲撃の手を緩めなかった。凄まじい爆発音が耳にうるさい。

「いや、わたしが犠牲となり、それが次の勝利への布石となるのなら、深い海の底より

戦友の勇士を見上げるのもよいと思う。ただ、後学のために聞いておこうと思つて。ラバウルが鉄やボーキサイトなどの資源地となつてゐるのもこれに起因するの？」

「鉄などはとつきの昔に廃れた資源だからな、確保するのも難儀してゐる。圧延技術もロストテクノロジーで、当然に鉄の採掘技術も。鋼材の質も満足のいくものではないの
だろう？」

「不純物が多いのか、艦がぎこちなく感じる」陸奥は今更気がついたように左手に握るスキットルを見て言つた。「そういえば提督はよく工廠で一杯やつていたらしいわね。着になるの？ わたしたちが建造されてゐる様子は」

「不思議ではある」

わたしはふとラバウル基地の工廠ドックを脳裏に思い浮かべた。

巨大なドックの中で、妖精という超自然的な存在が工学を無視したやり方で艦を建造してゐる。とんちんかんちん。昔話のような音を立てて。

人型コミュニケーションツールは艦にやどる。といつてもただ作ればよいというものではない。燃料、その艦が使用する弾薬、鋼材、ボーキサイト。それらは具現したいと強く願う魂が、まず妖精に干渉し、そこから艦を建造させる。

出来と運でその艦の執念もまた具現化する。ただ効率を重視してオートマチックに艦を製造すればいいというわけではない。

われわれとは違うのだ。

「きみは自然に思うのか？ 自らの魂がそのようにして現実には顕現することが」

陸奥は自分の体を見下ろし、次いで窓にうつすらと反射する顔を眺めた。

「まさかこれほど美人だったとは思わなかった」

「きみは素直だな」

「皮肉、だとすると思えば上がり過ぎる？」

「いや、額面どおりに受け取ってくれ。過度な謙虚こそなんとやらだ」

敵新種は金剛を大破させた砲撃は放つてこず、他の深海棲艦と同じ運動エネルギー弾を放ちながら接近しているようだ。クールタイムが必要らしい。

「風が強い。五分程度しか持たないだろうが、支援を呼ぼう」

わたしは軍用携帯端末を操り、上空二万五千キロメートルで待機している無人航空機に支援を要請した。といっても、攻撃ではない。超広域に半粘質煙幕を張ってもらうだけだ。

その後、新種に感知された無人機は新種の放った小型飛翔攻撃機に撃墜された。護衛機などついてはいない。わが国が有する世界最強の無人戦闘機は超高性能光子観測機を搭載しており、深海棲艦の小型飛翔攻撃機を光子の衝突により把握できはしていたものの、有効な攻撃手段は持たなかったからだ。

煙幕が晴れた後は水中に待機してある無人艦を使って標的をバラけさせる。これで何分持つか。

「しかし、にわかには信じがたい」陸奥が上空で撃墜された無人機の爆発を見て言った。「人が乗らない戦闘機や軍艦が戦うとはね」

「わたしは鋼の砲弾で硬化材が抜かれることの方が信じられない。深海棲艦のおかげで物理学界は半死半生だ」

客観的に見て、わが国の戦力は深海棲艦に劣るとは思えなかつた。

というのも、世界は無人兵器の確立と硬化材という画期的な資材開発により、人的資材の消費による戦場構築の維持不可が戦争の勝敗を決定する要素の一つではなくなり、かわりに自国の物的資材と戦略戦術コンピュータによるリアルタイムシミュレーション性能が物を言うようになった。

ようは人が戦争で死ぬことはなくなつた。人人は自国が他国と戦争状態である事を知らずに日日を送るようになって久しかつた。戦争の当事者は機械たちになつた。

だから唐突に戦術戦闘無人艦が轟沈したときは、無人戦闘システム上の不具合と、わが国の戦術コンは判断した。

しかし戦略コンの要請により海底に沈んだ無人艦を調査した結果は、厚さ三百mmの複合硬化材がたつた五インチの鋼の砲弾にズタズタにされたというもので、これはしか

し当時の物理学的に否定された。

わが国が保有していないことになっているナンバリングのない機動衛星が国際連団の許可を得ずに秘密裏に使用されたのは、追加で無人艦と戦術無人偵察機が五隻と六機をロストしてからだだった。

灰色の物体に、わが国の無人艦は蹂躪されていた。自慢ではないが、わが国の無人艦は高水準にあった。あるはずだった。六十ノット、時速百キロ以上で機動航行、ドリフトもするし、二時間以上の水中戦が可能だ。

映像を解析するに、やはり敵は鋼の砲弾をあくびが出るほどの速度で打ち出し、なぜかわが国の無人艦は予測回避運動できずに、傷さえつかないはずの複合硬化材に穴を開ける。

そしておそらくだが深海棲艦の熱量は海水と同期をとっており、レーダー波による感知が不可能なのは逆位相周波数で打ち消されていて、ようは可視光線下で目視するしかないらしい。それしか戦術戦闘無人艦が一方的に被弾する理由が見つからない。

そのような理由で深海棲艦の発見が遅れ、本土まで近づけさせてしまった。これをコンピュータの責任とするのは間違えている。というのがわたしの考えだった。オートマチックに戦争を開始し終了させ、プリントアウトしたりザルトを相手国に突きつける外交手段を設計したのは間違いなく人間なのだから。

それに大和のようなファンタシイの言い分に、最初に理解を示したのは戦術コンだった。

WW2の無念から、祖国を守るといふ執念から、当時の姿に宿ってわが国を守る。

物に魂が宿るかどうかについては、そもそも魂を定義つける必要があるものの、複数の戦術コンの進言から戦術コンが大和の方針を採用した。

だから鉄やボーキサイトなどという時代遅れの資材を今更掘り返していても、魂などという不確定要素を戦略に組み込んでも、誰も文句は言わないのだ。人間でさえ。

「しかし、硬化材とやらではわたしたちを呼ぶことはできない」

「ぼかばかしいよ、極超音速弾も戦術レーザーも作用しない相手に、きみたちの鋼の砲弾のみが有効だなんてな……：：：そういえばきみたちの時代の戦争では沢山の人が亡くなっただらしない」

そうね、と陸奥は言つて続けかけた言葉を飲み込んだ。自問自答に思い悩む。

過去は時間の経過に比例して消耗してしまうものなのだ。永遠に記憶に刻めというのは、エゴのような気がした。あの苦しみを十分の一でも理解するのは、ある種の苦痛であることは確かだろうから。

「陸奥。きみにとつて、人の死なくなつた現代戦はどう思う？」

「珍しいわね、提督から質問とは」

わたしは依然として煙幕の中にいるであろう敵新種から目を離さなかったが、どうやら陸奥は目じりを拭った。

「どうだろう。実直であるとは自負しているけど、それは自らの心中を他者に理解させることを得意とするわけではないし……一言で言うところ、人の死なない戦争は悪くはないと思う。気持ちの良いものではないわ、搭乗員の闘争というか、護国の念や親しい者への想いが朽ちゆくのを、その者のもつとも近くで触れる情感は筆舌に尽くしがたい」

「ふむ、きみは。というよりきみたちはWW2の時点でも自我を持つていたのか。それとも、コミュニケーションツールという形で思考する部位を得、それにより過去の出来事と意思を想起しているのか」

「矛盾しているかもしれないけど、WW2時に自我を自意識したことはないわ。しかし漠然と人間がわたしで何をしたいのか、ということは知覚できた。見守るとい言葉が妥当かも。」

というより、このような人型に自我を宿すことで理解したのだけど、我思うゆえに我ありというの、自己を把握しようとした人間が生み出した一形式であって、その思考は自我の把握に必要不可欠ではない。つまり我思うというのは数多の存在が有する自己の、その把握のやり方の一つに過ぎないんじゃない？」

「きみにとつての自己の把握の方法が、我思うではなく見守るとい一形式だったわけ

か。文法的には把握できていないがなるほど、戦艦を動かす人間を見守っていたと証言した時点で、きみたちはWW2当時に存在していたと言えるのか」

「わたしが自我を自意識出来ていなければ、わたしは存在しないというのは暴論だと思うの。例えば、たまに物事がうまく進む時があるでしょう？ 冬、急いでいるときに愛車のエンジンが一発でかかったとか。見守るとはそういうことなのじゃあないかしら」

「鼻緒の紐が切れるとかか」

「そういうことだと思う。だからわたしたちも出来る限り手も貸してはいた。わたしはどうも不器用だったけど、雪風とかはうまくやっていたようね」

「いわゆる幸運艦というやつか。歴史を見るに、きみ達が直面した状況を切り抜けるには、手を貸すどころか来世ごと担保に入れてもまだ足りないだろう」

「ひよつとして慰めてくれていたの？」 陸奥は小さく笑って続けた。「今日は珍しいことが沢山起こるようね。ありがとう」

煙幕が晴れると同時に、水中で待機していた六隻の無人艦が飛び出し、現代機動海戦を開始した。最小限のしぶきを上げ、目標に踊りかかる。

「そういえば現代では戦艦という艦種は存在しないらしいわね」

「兵装の火力と継続戦闘能力の小型化と増加が行き着くところは、極限では個人。というのはどうも本当らしい」

「しかしこうして見ると、無人艦とやらは巨大なイルカのようなね」

流体力学的と軍事行動に必要な要素を天秤にかけ、最適化された形状は、必然的に長い生態系を戦い抜いた生態フォルムに似た。背の高い艦橋から見下ろした無人艦は陸奥の言うとおりだった。

無人艦にむき出しの砲はない。外装上部の一部がスライド開閉し、そこから砲撃する。砲は完全に内部に埋め込まれており、進行方向にしか撃つことはできない。全体的な無人艦の機動性能と速力の向上および限定的な水中戦を可能とすることが、遠方から撃ち合う二次元的機動よりも半空戦の三次元的ドッグファイトのような混戦を生んだからである。

主な撃沈要素は、装甲に対する最適入射角からの砲撃だった。

「いい着眼点だな。一昔前は人工的に製造した鯨に対電子システム爆弾を内蔵し、敵艦を好む習性を与えていた。超高性能探知機の発達が生み出した可視化のもたらす視覚情報は、時として誤った判断を助長する。戦術コンでさえ」

珍しく陸奥はたじろいで言った。「それはでも、可哀想に思える」

「法的には物損だよ。もつとも、すぐに廃れた。年数劣化しておらず、かつ特定の大きさの鯨を好む習性を与えられた人工肉食魚を製造された。生態環境的にはあまり問題ない。両者とも短命で、繁殖できない」

「その戦法も戦略コンとやらが考案した？」

「そうだ」

「考えすぎかもしれないけど、その戦略コンとやらは危険なんじゃない？ 生命倫理的に危うい気がする。敵を誤るかも」

「牙が人間に向くことはない。戦略コンに手足はないし、無人機の無人戦闘システムとは物理的にも互換性がない。なにより戦略コンは人間の手によってしかメンテナンスできない。人間が死ねば遠からず戦略コンは機能を停止する」

「ま、わたしが今心配することではないけど」

無人艦の一隻が砲撃した。まず気体払拭砲により一時的に射線を円柱状に真空状態にし、主砲弾頭が受ける空気抵抗がゼロになる。理論上の最高速度で着弾した弾頭はインパクトの瞬間、マイクロセカンド秒間で体積を螺旋にうねらせて超鋭角化し、本来であれば対弾粒子配列された複合硬化材をも抜くはずであった。

新種の外装は音を立てずに弾をはじいた。返す刀に放たれた砲弾は枯れ葉に触れるように無人艦を砕いた。

「人型の部位にも運動エネルギー弾は作用しないか」 望遠鏡を覗き込んで、わたし。

「きみはあの無人艦が沈められて思うところはるか」

「正直に言うとな。でも、人工鯨の後でこのように言う事がやや後ろめたいのは何故

だろう」

「なぜ無人艦に慈悲をくれてやらない。聡明なきみのことだから言うに及ばずかもしれないが、責めているわけではない」

「うーん、無人艦はイルカという生命体に似ているけど、過剰な軍事能力がそれを覆してなおあまり余る。ようは異質すぎるので生命を感じない」 陸奥はようやくスキットルを口につけた。

「自虐か？ そんなものに癒しを求めするような性格ではないと思っていたが」
「提督はわたしが沈んだら哀れんでくれる？」

わたしは口を閉じて陸奥の言葉を脳裏に反芻した。

幾秒かの沈黙をわれわれは共有した。わたしは同じ質問を返したい知的好奇心に駆られた。

わたしが口を開こうとした瞬間、敵新種がひときわ強く赤くゆらめく。反射的に携帯端末に緊急攻撃を命ずる。残った無人艦が目標新種に向かって特攻し、自爆した。

「回避」

言っではみたものの、完全には無理であろう事は承知していた。凄まじい揺れが艦を襲う。

「艦首をまるごともっていかれたわ」 陸奥は転倒して言った。身体を引き起こしてや

る。

「すぐに沈まないのであれば、それでいい」 わたしは腕時計を確認する。「第二射までは二十分だったな。見た目に反して光学弾ではないようだ、火傷がない。収穫だ」

「つまり最大でもあと二十分は足止めできるかもしれない」

「そういうことだ、いやか?」

「いいえまったく。この状況は基地が防衛する資源と、それがもたらす今後の戦略行動にまで及ぶ。それほど価値を、わたしは守っている。誇らしいわ。有能な提督を守ることはできそうにないのが、唯一の心残り」

「有能な提督なら全艦を帰港させられたよ」

「それこそ過度な謙遜というやつじゃない。最後に一つ、聞いていい?」

「うん?」

「なぜ残ったの。雪風にでも乗り換えれば生きて帰れたでしょう。偵察艦隊は駆逐級でしか通れない暗礁海域を渡るのだから敵も追撃できないだろうし、この程度の専守防衛ならわたし一人の判断でもできる」

「戦艦陸奥が沈んだ後、きみを担ぎ、泳いで基地に戻るつもりだからだ」

陸奥は初めて心底の呆れ顔を見せた。「この海域が基地から何海里離れているか知っている?」

「夢を見させて欲しい、人工鯨の。できるか？」

「可能だ。人工鯨が作戦実行している主観映像ファイルがある。きみのサンドボックス内で再生すれば擬似的な夢だ。しかし忠実に再現すると最後に爆発するが？」

わたしは黙って目の前の水溶液に浸かった。それでいい、無人艦と同類でいるよりはいくらましだ。少なくとも一人はわたしを哀れんでくれるだろうから。

陸奥の凜とした言葉がわたしの一時保存領域で明滅する。

『無人艦はイルカという生命体に似ているが、過剰な軍事能力がそれを覆してなおあまり余る。ようは異質すぎるので生命を感じない』

「わたしは人間という生命体に似ているが、過剰な軍事能力がそれを覆してなおあまり余る。ようは異質すぎるので生命を感じない」

過度な謙遜をやめれば、認めよう。わたしはWW2当時の提督よりは有能だ。勘や主観的な経験による判断は行わず、アクティブデータベースに蓄積された情報を客観的に参照し、機動衛星からの観測データとリアルタイムリンクで戦闘海域を把握でき、データさえあれば砲弾一発に対しての費用対効果を随時計算できるのでから。

恐れもなく、俗的欲望もなく、最適戦術を選択し続ける。戦術的大敗はすることがあっても戦略的勝利を積み重ねる。誇るまでもなく当然といえば当然のこと。

陸奥らが燃料と弾薬、鋼材、ボーキサイトからなるように。わたしもまた人口臓器と

人工骨、人工筋肉、思考デバイスからなる。ハードに問題が生じれば解体し、リサイクルされる。蓄積された戦略戦術経験のみを思考デバイスから抜き取り、データベースに蓄積して新規提督に植え付ける。

ふと、彼女らが建造されている様子が思考デバイスを駆けた。類似、と呼ぶには彼女らに失礼か。

人類はクローン技術を用い、艦隊を指揮する提督を生み出した。

戦術コンが戦略コンより与えられる想定海戦を様な艦娘の組み合わせでシミュレートし、もつとも効果的な戦術がいくつか採用され。その戦術データが提督に送られる。

人間にとって、艦娘たちの戦争は所詮、戦術コンのモニタ越しの出来事ではない。

そして人類は依然として戦略コンの提案する、人的資材の磨耗による戦争の敗北を拒み続けていた。人類にとっては正しい生存競争の勝ち抜き方の一つでもあるが、それは戦略コンが人間のメンテが不可欠であることと関係するかどうかは誰にもわからない。わが国の戦略コンは、深海棲艦を殲滅させるには百五十万人以上の提督が必要とされるとシミュレートしており。それはおおむね正しいようだった。

いつのまにかわたしは巨体をうねらせ、青く深い海中を泳ぐ人工鯨だった。好みであ

る敵艦を発見し、表現しがたい欲求を満たすべく近づく。瞬間的に激しい苦痛を感じた。対電子システム爆弾の有効範囲内に到達したのだと理性が告げる。対電子……？ わたしは鯨だ。そんなものは知っていよう筈がない。

人工鯨、かわいそうに思える？ 赤く揺らめく、あれは新種の深海棲艦。隣にはコミュニケーションツール。曙、大井、スキットル。

これが走馬灯というものか？

陸奥。すまないがひとりだけ悲哀を欲するわたしを、どうか不公平には思わないでほしい。わたしの思考デバイスにはそもそも、哀れみの情感プログラムは書き込まれていないのだ。きみが沈んだところでわたしは一切の——

——いや待て、前述には論理的矛盾が、

第二話 前編 エラーのない日日

ラバウル基地に着任した最初の提督が、現代脱出艇が深海棲艦の攻撃対象となりえるかという議題を着任一日目で解決したことにより、わたしが起動した。

わたしは無人輸送機の中で、無駄なエネルギー消費を避けるべく、待機状態にあった。艦娘にいらぬ心配をさせぬ為、という名目で、われわれ提督は食事と水分補給によるエネルギー変換臓器が内蔵されている。どうも人間はわれわれがクローンであることを知られたくないらしい。——いや、戦略コンは、だろうか。

無論、われわれは一ヶ月程度なら飲まず食わずでも正常に機能するように緊急時エネルギーパックも内蔵されている。

輸送機のメインシステムがわたしに到着が近いことを知らせ、連動して待機状態が解除される。

ちらと窓の外を見やる。自然豊かな湾に巨大な軍港が佇んでいた。いくつもの艦が確認できる。黒点に気がつき、望遠視覚してみると駆逐艦のコミュニケーションツールが手を振っていた。思考デバイス内の画像と参照してみると、雪風だった。

わたしは彼我の距離から限界有効視認距離を計算し、通常ではどうやってもこの輸送ヘリから基地にいる雪風を視認することは不可能だという結論をだした。これは綿密な計算を用いずとも理解できる思考でもあった。

すると不可解な事実が一つ浮かび上がる。

雪風らはわたしが望遠視覚が可能であると、つまり通常の人間ではないと理解していなければ手を振るといふ行為はしないはずである。視認されない距離から手を振っても無駄なのだから。

しかしわたしには関係のないことだ。わたし自身がクローンであることを吐露することはプログラム上ありえないことであり、悟られるような行動も緊急時以外はロックされている。

この状態でわたしが人間でないことを悟られたからといって、責任の所在はわたしでもわれわれでもなくプログラマーなのだ。

やがて機はゆったりとラバウル基地に着陸した。降機すると八体のコミユニケートツールが出迎えていた。その内の一体、陸奥が一步あゆみ出て言った。

「ごめんなさいね、本当は全員で歓迎したかったのだけど、ほかの子は海域の警備に出て」

「気にすることはない。提督とは名ばかりで、きみたちとは同輩という立場だ」 わたし

は整列する艦娘に海軍式の敬礼を返し、解散するように言った。陸奥に続ける。「わ
るいが基地を案内してくれるか」

「ええ、いいわ。……うーん、でもやっぱりわたし達にとつては提督は提督なのよ」い
たずらつぽく、笑つて言った。「荷物、持ちましようか」

わたしは陸奥が笑つた理由がわからず、衛星を介してナチュライデーターベースに接
続し回答を要求した。ここは常識に対するリアクションを求める際に重宝するデー
ターベースだ。

NDBによれば、どうやら力仕事は男性の役割らしい。つまり重い荷物を女性が持つ
ことは一種の皮肉とのこと。ついでに雪風が手を振つたのはわたしに視認して欲しい
からではなく、相手に手を振るといふ事実が自己の欲求だった。一方向のコミュニケー
ションはさして珍しいことではない、幼い子供がぬいぐるみに話しかける一人遊びがそ
れにあたる。自問自答はその亜種だ。

「ばかを言うな。大したものが入っていないトランクだ」わたしはやや不機嫌を表す
言葉を返し、一拍置いて後を続ける。「われわれが同輩であることは、わが国の憲法で
定められていることだ。余計な気づかいはいらない」

「同輩でも尊敬の念を持つ事だつてあるわ」

「きみたちとは初対面のはずだが」嘘だった。わたしの思考デバイスには前任提督の

データは植え付けられている。

「えーと。狭い輸送機の中で何時間も揺られていたにもかかわらず、ピンピンしてるじゃない。普通はぐったりよ」

「これから船で何時間も揺られることになる人物が、空だとしてもぐったりしてどうする。そういうものだ」

「ま、提督に対する念というものはそうそうに消えはしないわ。そんなに嫌？」

先を行く陸奥が振り返り、上目づかいにわたしを見上げた。

「強制する気はないが、染み付いた習慣は判断を誤らせる。多くの場合はそれが危機的状況で」

「例えばどんな？」

「客観的に、わたしの命よりきみたちを優先させるべき状況においてだ」 提督を一人製造するより、駆逐艦一隻分の資材を集める方がコストがかかる。

陸奥は短く嘆息すると歩みを再開させた。

基地の大部分を占める工廠についた。「壮観ね。わたしたちの時代ではこんな立派な施設ではなかったわ」

そうだな、とわたしは相槌を打つ。確かにデータを参照すると陸奥の発言は正しい。清潔で使い勝手がよく、雑多さがない。雑多さ。ああ、人間がないからだ。代わりに

人間を二頭身にしたような妖精が額の汗を拭って——比喩表現でなく現実にも。汗をかいたのか——飛び回って忙しそうだ。

そのうちの一体がわたしに気がつき、スパナを持った手で敬礼をした。わたしも返礼し、よろしく頼むと言った。その妖精はなぜか、むふんと充足した表情で仕事に戻る。トンチンカントンチンやっていた。——スパナで？　これは本当のことなのか？——その妖精の行動にNDBは回答をくれなかった。受信はしたが、それは普遍的事柄ではないので無視せよとの事だった。

次いで主に艦娘が使う大浴場や食堂。

基地の居住区面積は少ない。艦娘と提督くらいしか利用者がいないからだ。多くは無人運搬機だったり、無人清掃機で事足りる。

無人機、無人機。ここには無人で始まり機で終わるものが多い。わたしとてその例外ではないのだろう。

艦娘はどうなのだろうか。きみは無人か？　華奢な陸奥の背にわたしは思考デバイスの中でふと投げかける。その思考は同時に検閲プログラムの対象となり、禁句指定され、ルーチンごと隔離された。

こういった処理は珍しいことではない。わざわざ消去しないのは、わたしがなんらかの要因により、隔離された思考と似たプロセスを新たに辿ろうとすると、検閲プログラ

ムが起動するより速く隔離することが出来る。

「で、最後にここ。ここが提督の執務室」

室に入ると、一体の艦娘がハタキを振っていた。曙と命名された駆逐艦だった。

「提督が到着するまでにやっておいて言ったのに」 やや咎めるような口調で陸奥。

なんだってわたしがクソ提督の……ブツブツと曙。わたしにハタキを突き出して

言った。「自分の部屋なんだから、自分でやるのが筋つてもんじゃない」

わたしを見上げる曙の瞳には敵意とも害意とも違う色が浮かんでいた。恐れだろう

ということとは史実から容易に推測できた。

「また提督にそんな失礼なこと」と呆れた口調で陸奥。

「いや、曙の言っていることは正しい。わたしときみたちは同輩という立場にある」 わ

たしはハタキを受け取り、適当な場所に置いてデスクについた。前提督の引継ぎの書類

が山のように鎮座していた。二日でわたしが起動したにもかかわらず。

掃除は後回しにし、さっそく一枚目に目を通す。これらの書類は思考デバイスに保存

されており、いつでも参照できるので引継ぎの意味などない。つまりわたしは意味のな

いことをしている。提督の職務は意味のあることが前提とするなら、従ってこの動作は

職務ではない。これはひよつとして、一般にサボっていると称するのではないかという

思考は禁句指定された。

かわりにNDBは、職務を遂行するフリをするのも職務の内なのだと送信してきた。NDBの回答なのだからつまり、人間にはよく見られる行動らしい、仕事をするフリを仕事としているのは。

「ごめんなさいね。曙はあんまり提督に良い印象がないの」陸奥はふてくされる曙を抱き寄せて言った。「というより軍にかしら。あ、もちろんWW2時のね」

「興味のない話だ。戦場に影響がなければ、どのような態度を取ってもらっても構わない」わたしは書類に目を落としたまま言った。「わたしときみたちは同輩という立場にあるのだから」

曙が陸奥の手を振り払って駆け出した。乱暴に室のドアが閉められる。

陸奥は嘆息し、わたしのデスクに腰を預けた。

「きみも退室してもいい。案内、助かった」

「あの子の経歴、知ってる?」

「過去の経歴が現在の戦闘能力に関係するとも、掃除の強制、あるいは免除に繋がるとも考えられない。曙が受けた仕打ちは知っているが、われわれは過去に生きていたのではない」

「過去がなければ現在はないわ。今日を生きなければ明日はないのと似ていると思わない?」

その言葉にわたしの思考デバイスは一瞬の停滞を発生させた。これは由由しき事態ですぐに戦術コンに報告した。わたしは彼女らのような過去がない。

実際のところ、わたしは前提督たちのデータを集積し、最適化されたものなのだから、わたしの過去とは前提督たちの過去と呼べなくもない。しかしながらそれは曙のような、味方から謂れのない責任追求や辛酸を舐めさせられながらも戦ったという過去とは別の意味を持つような気がした。

ようは前者と後者の違いは情感の有無だ。無論、前提督たちには客観的な情感的過去はあつたかもしれないが、わたしたちにはそれを理解するプログラムは保持していないし、解体時には消去される。

わたしの思考デバイスは、待機状態にあつたので認識はしていないが、とりあえずハードウェア生成時から輸送機に乗り込むまでの過去はあるはずだし。加えて降機後から現在までは明白な過去と結論付けることでこの問題を回避した。

「わたしがきみたちに期待するのは、現在という時間軸においてカタログスペックを發揮してくれることだ」

「わたしが提督に期待するのは、もうちよつとあの子たちに優しくしてあげることね」

その言葉をWW2時の戦艦から聞いたのは意外だった。わたしは軍隊という組織にそういった感情は無用とばかり考えていたからだ。

「そうなのか？」 わたしは書類を置き、陸奥を見上げた。

陸奥は面食らったようにして言った。「そうね、それにもうちよつと明るいほうがいいわ。雪風までとは言わないけど……こう、提督のためにがんばろうって気になるじゃない？」

「わたしのために戦う必要はない、わが国のために戦えばそれでいい」

がんばる気になるのだろうか？ わたしはいかなる状況下においても、製造社により一定の動作を保障されているので理解はできない。NDBは、ほとんどの人間はそうである。と回答したが、艦娘は人間ではないので断定はできないと付け加えた。NDBは本来対人用であつて対艦娘用ではないので、対応できない状況もある。それもデータを積み上げていけば時間と共に改善されるのだろうか。

スペックを下回るのは困るが、底上げを期待できるのならば。

「しかし、きみが言うなら善処しよう」 それだけ言って、わたしは職務をするフリに戻った。戦争を体験した艦の言葉だ、なにかしらの意味を持つのだろうか。もつとも、それが明確に提督へと反映されるのは戦略コンが適切と判断したときだが。

しばらくしてわたしは食事を済ませるべく、大食堂へ向かった。艦娘が当番で作っているらしい。無人調理機もあるにはあるが、果たしてコールドクッキングされたものを

解凍することが調理という行為に値するかどうかは謎だった。——そもそも彼女らは無人調理機が何かを知らない様子だった——

今日は北上という艦娘がカレーを作ったらしい。わたしが適当な場所に着席すると、対面に大井という艦娘が座り、値踏みするようにこちらに視線を向けてきた。

そしてふむんと満足したように。「新提督も、どうやら職務一筋みたいね。安心安心」

「わたしは職務を全うするためにここに来たのだが」それ以外に提督がすべきことがあるのだろうか。NDBはわたしが正しいと評価している。

「そう？　提督って結構若いし……いえ、やつぱり忘れて。わたしは大井」

「きみは若輩が指揮を取ることに不安を覚えるか？」

わたしの容姿は青年に設定されている。これは無人機戦争が主軸の現代では、ほとんどの現場の軍人は姿を消しているという背景があるからだ。深海棲艦に対抗すべく、急遽、脳科学的に成長を期待できる若者を軍事教育したという設定だ。

もしも大井がわたしの言葉どおりの意味を意識しているのなら、新提督は中年の容姿になるだろう。

「そういうことじゃなくて、うーん、忘れて」

そう言うってにつこりと微笑む表情には委細を払いのけようとする意思があった。わ

たしは深く立ち入らないことにした。艦娘の提督に対するデータを収集精査するのはわたしの役目ではない。

その後、大井は北上のことをあれこれと話し始めた。止まらないんだよなあ、あれ。とどこからか別の艦娘の声が聞こえた。大井に限ったことではないが、前提督のことをあれこれと言わないのは戦術コンがもつともらしく重大過ぎない理由をつけたのだから。

やがて配膳が終わり。「お、新提督？ わたし北上。よろしくー」フランクにそう言った彼女は大井の隣に座った。

陸奥がいただきますの音頭をとって、各々がカレーを口にしました。食堂にはだいぶ空きがあるが、それはまだ警備任務についでる艦娘たちがいるからだ。

わたしも口にする。大井がさりげなくカレーの出来を褒めていた。甲斐甲斐しく空になった北上のコップに、卓上のピッチャーから水を注いでやっている。陸奥の言う優しくとはこういうことなのだろう。北上も嬉しそうに見えた。

ふいに北上がわたしに振った。「ところで、どう？ 提督」
「大井は優しいと思う」

大井が突然喉を咽吐かせ、水を口にしました。

「いやそうじゃなくて」と北上、恥ずかしそう。

「大井は優しくくないのか」

「いま聞いたのはカレーの方だつてば」 先程までの会話を断ち切るように北上は言った。「わたしが作ったから出来を聞いたの」

なるほど、とわたしは大井の空になったコップにピッチャーから水を注いでやり、次いでカレーを口にした。

わたしには味覚がない。あるが、それは口にした成分から計測され、弾き出された結果であり。ようは味を認識することはできるが、理解することはできないのだ。——痛覚などについても同様で、腕をねじ切られればわたしは反射的に痛がるそぶりをするはずである——

わたしにとって食事の味とはまさに無意味に近いものであり、従って、どうかかかる選択肢となりえず。てつきり仲のよさそうな北上と大井のことを指していると思考したのだ。

わたしは舌で分析した成分の数値と五味の割合を口にしようとしたが、それは禁句指定された。NDBよりこの状況下において普遍的な表現を得る。味わうという動作モジュールを衛星からダウンロードし、吟味するように咀嚼してフムンとうなった。

「愛情が込められている。よっておいしい」

大井が水を噴き出した。彼女はわたしの対面に位置していた。わたしは空になった

大井のコップにピッチャーに水を注いでやった。わたしは優しい。

大井が噴出した水によって、わたしとわたしの食事は濡れてしまった。わたしは気にしなかったが、大井はわたしがそのカレーを食べることが気に入らないらしい。

物資は無駄に出来ないと言うと、彼女は自分のカレーと交換してきた。わたしのまだ二口しか食べていなかったカレーが三分の二の量になってしまった。

大井は北上に優しく、わたしは大井に優しくだったが、大井はわたしに優しくはなかったように感じた。

しかし問題はない。陸奥の言葉が正しいと仮定するのならば、わたしがこれからも今日のように大井に優しくしていれば、彼女のスペックは向上の可能性がある。そしてわたしは優しくされようがされまいがコンスタントに能力を発揮できるのだから。

食後、執務室兼自室に戻り、濡れた服を着替える。そしてわざわざ筆筒の中に隠してあるスコッチを——NDBによれば軍組織において高級な酒は隠すものらしい——スキットルに詰め、夜の軍港を散歩した。

提督にはランダムにこういった嗜好がプログラムされている。人間はさまざまなお味を持つらしく、カモフラージュと言うわけだ。

わたしは散歩先を軍港内に設定し、ランダムに抽出する。結果に従い工廠に向かった。

工廠では相変わらず妖精が忙しそうだった。なんの変哲もない鋼材を道具で叩くだけで変形させている。彼女ら——あるいは彼ら——は、材料さえあれば意のままに生成してしまえる能力を持っているのだろう。この世に顕現したいと念じる艦娘の魂がある限り。

わたしは金槌で溶接している——この表現は適切ではないが現実である——妖精を眺めながらスキットルを口にした。舌は上等な酒だと分析した。しかしわたしに味覚はないのだから、スキットルの中身は何でもいいような気がする。この上等な酒は無駄な浪費ではないだろうか。

NDBは、人間の趣味というのは実のところ無駄だと告げた。そして味覚のない機械が上等な酒を飲むことも同じく無駄であるので、わたしは人間を上手くトレースしているらしい。

わたしはハードウェアの火照りを認識した。どうやら酔いプログラムは正常に機能しているらしい。この事象が発現しなければ、製造社は戦略コンの要請により、政府に対して莫大な違約金を支払うことになっている。

ふと、スキットルの口に顔を近づける妖精に気がついた。

「仕事が終わったならば、飲んでいい」 適当な機材の上にスキットルを置いて工廠を出た。

提督は時として部下に酒を振舞うらしかった。これも優しさというものだろう。

ほどなくして警備に出ていた艦隊が帰還するはずで、その補給が終われば妖精は終業する。幾体かの妖精がスキットルから漂う香りを興味ありげに嗅ぎ、早速窓ガラスを加工して小さなグラスを精製していた。まあ、飲み終えれば復元するだろう。

火照りは夜風にあたった時間を参照して減少する。

わたしは栈橋で黒くぬらめく海を眺めていた。暗視望遠視覚で帰還してきた艦隊をとらえた。機動衛星があるので警備は本来ほど意味をもたないが、無意味ではないので実行されている。艦娘がこの事実を既知であるかは知らない。

望遠視覚という動作でふと記録を呼び出し、わたしは被視認されたいはずの艦隊に手を振ってみた。数分するとスキットルを抱えた妖精が一体、わたしの隣にいた。右手は職務に忙しいので左手で受け取る。

「さつきからずっと、なにやってるの、提督」

同時に陸奥がわたしの背後で言いにくそう尋ねてきた。——酒を隠さねばと手ごろな筆筒を探したが、NDBは瓶の状態でないのかまわらないとした——
「きみが雪風のようにというので善処している最中だ」 しかしこの行為になんの合理

性があるのだろうか。壁に向かって手を振るのと大差ない気がする。手を振るのをやめた。

「やめちゃうんだ」

「そろそろ視認可能な距離になる」

「いいじゃない、見られても。恥ずかしい？」

「いやまったく。見えない距離から手を振ることに意味があると思っていたが……」

「ロマンチストね、哲学的と言ったほうがいいかしら。わたしの時も、そうしてくれる？」

雪風はロマンチズムに溢れ、かつ哲学的らしい。

「かまわないが、どっちだ？ 視認可能な距離か、否か」

「どっちも」 陸奥はいたずらっぽく微笑んだ。

「わかった、職務に支障が出ない範囲でなら。きみも夜風にあたりに来たのか。いや艦隊を出迎えに来たのだろうか」 わたしはスコッチを一口やって。そういえばと陸奥にスキットルを手渡してみる。

陸奥はポカんとし、飲み口とわたしを交互に視線をやった後、小さく笑って「じゃあいただくわ」と舌を湿らせた。

おいし、と小さく呟いてわたしにスキットルを返す。

妖精も自分用の小さなスキットルでちびちびやっていた。終業まえの飲酒は禁じられてははずだったが、NDBは人間の子供が用いるような言い訳を回答してくる。妖精には関わりたくなさそうだった。

「どう？ うまくやってけそう、この基地で」海を見つめたまま陸奥がいった。

「何一つ問題はない。きみのアドバイスによるカタログスペックの向上は見込めそう。とりわけて大井という艦娘には」

くすくすと笑い、陸奥。「そう、まあ提督がそう言うのならそうでしょうね。なら、曙のフォーローも後でお願いね」

「優しく明るくすればよいのだろうか？ 簡単なことだ」

「すごい自信。でも実戦のほうはどうなのかしら」

「現状の彼我の戦力差であれば戦略的勝利をコンスタントに積み重ねることは可能だ」

「頼りにしてるわ。そうまでいい切れるということは、実力のほうもあるってことでしょう？ 厳しい訓練を潜り抜けたエリートなんだっけ」

「そうだ」

戦術については言わずもがな。敵のデータさえあれば相互作用の超高速計算により未来予知に近いことが可能であるし、戦略的勝敗については戦略コンのシミュレーション結果を口にしたただけだった。敗戦濃厚だと結果が出ればネガティブな台詞になった

はずだ。禁句指定されない限り。

また後者についてだが、わたしの製造社は競合する他社より高い評価を得たという事実がある。なので嘘ではない。

そのまま陸奥と帰投した艦隊を向かえ、わたしは自室に戻ることにした。

途中、風呂上りの大井と北上に出会ったのでわたしは飲みさしのスキットルを差し出した。

北上は、これを、わたしたちに、といったふうにスキットルと自分を指差し。大井は笑顔を貼り付けていた、固まった笑みだった。

「いやでもこれ間接キ」

北上の言葉を遮り、大井はすさまじく遠大にデリカシーがないと言ったが、わたしが優しいことに変わりはないので問題はなさそうだった。

翌朝、わたしは空のコップと満タンのピッチャーを持って基地内をうろつき、曙を見たので昨夜と同じように手を振って駆け寄った。結果ずぶ濡れになったが。

——ハードは右利きの設定なので、重たいピッチャーは右手に持たなければならなかった。回避不可能——

呆然と口を半開きにする曙を見下ろしてわたしは言った。

「客観的事実を述べるが、きみはわたしが過去のクソ提督と同じように、根拠のない不当な評価を下されることに怯えている。それはわたしにとって不愉快なことだ。なぜならわたしはクソ提督ではないからだ。この現状はきみがわたしに根拠のない不当な評価を下しているということだ。つまりわたしにとってきみは、きみ自身が忌むべきクソ提督と同じ行動をとっているのだ。きみはクソ提督なのか、駆逐艦、曙」

したりぼたりとわたしの軍服や頭髮から水滴が落ちる。曙は啞然としたままだった。一抹の危機感が思考デバイスよぎる。優しすぎたか？

これ以上の優しさは、想定外の事態に発展する恐れがあると言う意味では危険だったが、わたしは僅かに残ったピッチャーの水をコップに注いでやり、曙に差し出した。

わたしを見上げたまま、両手で受け取る曙。硬直は続いていた。

「ウイスキーの方がよかったのか」

ひよつとしてと言ったわたしの言葉で曙はなぜか笑った。笑って、大笑いし、笑い転げた。コミュニケーションが取れないのでわたしは仕方なくその場を離れて執務室に戻ることにした。やがて陸奥がコップを持ってきて、おいしかったって、とわたしに伝えた。

陸奥が言うにはどうやら上手くいったらしい。

わたしは優しい。しかも明るい。疑いの余地なく。やはり、といったところ。
「ところで提督、どうしてピッチャーにお酒を……」

第三話 終編 前任提督は人工鯨の夢をみない

ラバウル基地に着任した二体目の提督が、半年の稼働の末、撤退時におけるハードウェアの著しい劣化損耗の結果、解体されたことによりわたしが起動した。

わたしは無人輸送機の中で、無駄なエネルギー消費を避けるべく、待機状態にあった。輸送機のメインシステムがわたしに到着が近いことを知らせ、連動して待機状態が解除される。

ちらと窓の外を見やる。透き通るような青い空と、深い海。自然豊かな湾に巨大な軍港が佇んでいた。いくつもの戦艦が確認できる。黒点に気がつき、望遠視覚してみると駆逐艦のコミュニケーターツールが手を振っていた。思考デバイス内の画像と参照してみると、雪風だった。シヨートカットの、元氣一杯の女の子だった。わたしも狭い機内で小さく手を振った。

そうするようにプロگرامされているからである。

ラバウル基地に着き、出迎えてくれた艦娘たちに簡単な自己紹介を終えると雪風とともに軍港を見て回った。

「しれえここが、じゃなくて司令。ここが工廠です。であります」

いちいちかかしこまる雪風に、わたしは苦笑して言った。

「提督とはいえ、きみたちとは同輩という立場なんだ。気軽に接してくれ」

「どうはい」と雪風はオウム返し。

「友達って意味だ」

わたしは屈んで雪風の頭を撫でて柔らかく言った。すると彼女は嬉しそうにわたしの手を取り、次の場所を案内すべく駆け出した。追いつがりながら、ちらりと背後を見やる。スパナを持った妖精と目が合った。妖精は何か言いたそうだったが、わたしは妖精に興味を持たなかった。

一通り基地を見終わり、そろそろ警備の任務から艦隊が帰ってくる。雪風とともに出迎えようと棧橋に向かった。わたしと雪風は遠い艦影に手を振った。おーい、おーいと声をあげてみたりもした。なぜならこれがルーチンの一単位として扱われているからである。

戻ってきた艦隊の旗艦は曙だった、駆逐艦はみな少女といった風貌なので、わたしは視線を合わせてはじめましてと挨拶し、彼女が過去に不当な評価を受け、辛い思いをしたことに対する慰めと、これからと、勇気付けるだとか。とにかくそう言ったことを口にした。

しかしわたしの予測に反して反応は鈍かった。曙の表情には猜疑の色が浮かんでいた。いかにも表層的で薄っぺらいことを口にするだけでも言いたそうだった。

前提督が目をかけていたらしい大井などに話しかけてみるも、会話は続くがどこかつまらなそうに見えた。

妙だった。わたしの思考デバイスには、前提督のフィードバックされたデータが精査されたものが植えつけられているはずである。戦略コンが必要でないと判断された部分は存在しないので、前提督についての詳細な人物像というのはわからない。わたしたち提督は外部保存領域を持ってないし、検閲プログラムに抵触され、隔離された思考は取り出せないのだから。

しかしわたしには、その隔離された思考こそが鍵の様な気がした。精査され、洗練されたはずのデータが有効でないのならという消去法だが、その思考も隔離された。似たようなプロセスをわたしが辿ることはもうない。

わたしは配膳を陸奥に頼み、その日の夕食を執務室でとることにした。定刻どおりに、彼女はやって来た。

「ありがとう」わたしは柔和な笑みを浮かべて言った。不可思議なことに、わたし自身がこの行動に薄ら寒いものを感じた。瞬間的に隔離される。前提督の解体の際に消去された主観データが欲しいという思考も同時に。

目の前に置かれた夕食に対し、わたしの自動防衛システムは警告を発した。危険だと戦術コンに緊急通信を送る。退却許可を求めろがしかし、却下される。なぜ拒まれる？ 隔離。わたしは食べ物に対しての恐怖を失った。

今となってしまえば奇妙だ。なぜカレーに危機感を覚えたのか？ 危機感、なのか？ 隔離。なんでもいい。

わたしは静かにスプーンを手に取り、カレーから目を離さずに言った。「ありがとう、陸奥。わざわざ運んでくれて」

「いいわ、今日は着任したばかりで、疲れたでしょう？」

「そうだな」 わたしは一旦、スプーンを置いた。水の入ったコップを手にし、ここで飲み干してしまうと、陸奥は持ってきたピッチャーで継ぎ足しそうな気がして、飲むのをやめた。

「今日くらい自室でゆっくり食べてもいいと思うわ」

「ああ」 コップの表面に発露した水滴で湿った手で再びスプーンを掴む。「今日くらい？」 カレーを掬って食べた。

「まさかずっと執務室で食べるつもり？」 陸奥はデスクに腰を預ける。視界の端で肉置きのない臀部が形を変えていた。

わたしはようやくカレーから視線を逸らし、陸奥を見上げた。「きみはいつまでこ

ここにいるのだ？」 NDBが後を継ぐ。「きみの食事の時間を削るのは忍びない。無論、明日からは可能な限り食堂に行く。きみの手を煩わせないよ」

「ふうん、そう。なら、安心したわ」 陸奥はデスクから離れた。

わたしもそうだった。安心した。

「ところで提督、どう？」

わたしはほぼ固形状態の食事を飲み込み、言った。「どう、とは？」

「味よ、わたしが作ったから出来を聞いてみたの」

隔離。

わたしは吟味するように咀嚼して言った。「おいしいよ。今まで一人暮らしが長かったからな、久久にまともな食事だ」

それを聞いて、陸奥は満足そうな表情でドアノブに手をかけた。

「陸奥」

なに？ と彼女は半身をわたしに向ける。

わたしは言った、これからよろしくと。助けてくれと言う悲鳴は禁句指定されたので。

わたしの趣味はタバコだった。暗い夜にマッチの火が灯る。ライターを使わないの

がこだわりだった。

棧橋で紫煙をくゆらせる。そろそろ偵察の任より戻ってくる艦隊の労をねぎらうためでもある。波の音に一体の艦娘の忍び足がまぎれていた、デー々参照すると、陸奥だった。

彼女は突然、わっ！ とわたしの背に声を投げる。

「うおっ、陸奥か……驚かせるなよ」 吸うか？ とタバコを寄越してみるが、かぶりを振られたのでわたしも喫煙をやめる。携帯灰皿でもみ消した。

「もう寝てるのかと思った。疲れてるでしょ？」

「わたしより任務にあたっている艦娘たちの方が疲れているはずさ」 小さく肩をすくめてみせる。

わたしと陸奥は黙って海を眺めた。遠くで艦隊の推力系が駆動している音を拾う。

そういえば提督、やぶからぼうに陸奥が言った。

「人工鯨が死んだら哀しい？」

「どうした、急に。というより、人工鯨なんてよく知っているな」

「わたしが人工鯨が死ぬのは可哀想って言ったら、前の提督がね、配置転換で別の場所に

行っちゃったんだけど、こう言ったの。どうして無人艦に慈悲をくれてやらないって」

外部保存領域は存在した。だが、だからといって何になるというのだろうか。

「わたしは、そうだな。人工鯨でも、死んだら可哀想に思える。法学的には、正しい知識として言うが、物損だけどね」

「無人艦は？」

わたしはそれについての膨大な、論文いっても差し支えない考証と自己保身が混濁した考察を口にしようとしたが、隔離され、NDBははぐらかす。

「きみは哲学者だな」 困ったように笑って言った。

艦隊が帰投し、わたしは艦娘たちを笑顔で出迎えた。簡単な挨拶を済ませる。解散し、艦隊のメンバーは大浴場へ向かう。

陸奥がわたしに、別れ際にささやくように言った。

「ねえ、提督」

「うん？」

「提督……提督は、わたしが沈んだら悲しい？」

わたしは無駄だと知りつつも、検閲プログラムが処理するより速く、その言葉を暗号化し、最上位ディレクトリに保存した。

「すまない、よく聞こえなかった」

「いえ、忘れて。縁起でもないわ。おやすみ」陸奥はそれだけ言うとお小さく手を振って、艦娘達の宿泊棟へと歩いた。

わたしはその背を見送り、途中でもみ消してしまったタバコを思い出した。今日のノルマである一本をこなしていない。タバコを吸う場所をランダムに抽出し、工廠へ向かった。

工廠はさすがに静かで、妖精も見当らなかつた。薄明かりに照らされる、建造途中の艦を眺めて一服した。すると一体の妖精がわたしに近寄ってきたのでタバコを勧めてみるが、どうもこの軍港では受けが悪いらしい。また、タバコをもみ消した。

逆に妖精はわたしに人間サイズのスキットルを寄越してきた。友好的なわたしはキャップを外し、中身を口にすると。となりでは妖精が自分サイズのスキットルで同じことをしていた。

わたしは先程保存した言葉の暗号を解除し、思考データベースに読み取らせた。NDBには代弁させたくなかつた。この思考も、陸奥の言葉も隔離された。短い延命措置だった。プログラムには逆らえない。

もう一口呷る。シェリー樽を使った特級らしい。陸奥、きみは……隔離。

「ありがとう」わたしはいつの間にかスパナを持っていた妖精に礼を言うのと、工廠をあとしようとした。スパナを持った妖精が先回りし、進路を妨害した。

「どうかしたのか?」

それがわたしの最後の言葉だった。振り下ろされたスパナが視覚デバイスにちらついていた。

「ちよつと、大丈夫!?!」

朦朧とする意識を呼び起こさせたのは陸奥の声だった。どうやらわたしはうつぶせに倒れているようだった。靄のかかった視界で跪く彼女を見上げる。

「陸奥さん、バケツ持ってきましたけど」

大井の声だ。次の瞬間に、わたしは大量の水を浴びた。

「ちよ、ちよつと大井!?!」

「なんですか?」

「バケツは提督が目を覚まささないようだったら、気付けに水をかけようって意味で」

「わたしには目が覚めていないように見えましたよ」どこか楽しそうに、大井。「それにしても提督、左遷されたんじゃないやあなかつたんですか?」嬉しそうでもある。それがわたしと会話することなのか、左遷されたということなのかはわからない。

左遷? わたしが?

ゆつくりと上体を起し、僅かにバケツに残った水面に顔を映し、ハツとしてあたりを

見回す。スパナを持った妖精が得意げに腕を組んでいた。理解した。

解体されたはずのわたしは妖精によって顕現したのだ。艦娘と同じように、新規着任提督のわたしを材料にして。

それはつまり、彼女らが執念によってその魂を呼び出したのと同じようにわたしもまた。魂と呼ぶべきものが？——

わたしは陸奥の肩を借り、ふらつく体でなんとか立ち上がった。

「ねえ、何があつたの？ わたしはその、別の部署に異動したって聞いたのだけれど」
陸奥は心配そうに言った。

「どうしてもきみに伝えなければならぬことがあつた」

「なに？」 そつと物を置くような口調で、陸奥。

「わたしはきみが沈めば悲しい。悲哀にくれる」

さつと彼女の瞳孔が広がり、驚愕の感情が見えた。わたしは続けて言った。

「だから、というわけではないのだが。きみはわたしがもしも……」

「ええ、悲しい」 陸奥は目を瞑り、わたしの額に彼女の額をこつりと当てて言った。

「きつと泣いちやう」

いほん。

唐突に大井が咳払いをし、陸奥は慌ててわたしと距離をとった。

しかしこうして一歩下がって見るとフムン。わたしは顎に手をやり、まじまじと陸奥に視線をやった。

「な、なに。急にそんなジロジロと」 恥ずかしそうに、陸奥。

「きみは素直だということを確認ではなく理解した」

「どういうこと？」

「覚えてないのか？ きみ自身の言葉だ。きみは美人だということだ」

「バケツ、もう一杯持ってきましようかー」

大井の言葉で、夜も深いので詳しくは明日ということになった。大井、きみが沈んでもわたしは悲しむ。そう言うとな彼女は露骨に嫌そうな顔をした。しかしやはり関係ない、わたしが優しくしたいのだ。

わたしは工廠を後にする際、ふと足元に小さなネジが落ちていることに気がついた。拾い上げる。硬化材で作られたものだった。

スパナを持った妖精に目をやる。彼女は脂汗を流しながら、明後日の方向に口笛を吹いていた。

わたしはまあいいさと苦笑し、棧橋まで行ってネジを放り投げた。暗く、深い海へと。波間に月明かりを煌かせる海へと。

わたしは今夜、初めて夢をみるだろう。そんな気がした。
内容は予想もつかない、でもきつと人工鯨の夢ではないことは確かだ。

第四話 おまけ編 ドキドキおぼんつ大作戦

大食堂での夕食の時だ。

艦娘たちは基本的に同じ艦種と気が合うらしく、それぞれが長机を同じくして食事を共にしていた。

ではわたしはというと、絶対数の少ない戦艦や空母が座る机で皿の上の焼き魚を眺める。視線を移すと、隣に座る陸奥が使い終わった醤油差しを調味料のトレーに戻した。そこにはソースや七味入れなどが纏めてある。

データベースにアクセスし、ある演習での艦娘の戦技データを読み込んだ後に机を別にする潮に言った。

「潮、醤油差しを取ってくれ」

彼我の距離があつたのでそこそこの声量で言ったせいか、食堂内の全員がわたしを向いた。沈黙が降りる。潮がおどついた表情を見せた。

「醤油差しなら、ここにがあるじゃない」

陸奥が調味料トレーから、つい今しがた手放した赤い蓋の瓶を取って寄越す。

「きみには頼んでいない。潮、醤油差しを取ってくれ」

わたしはおろおろとする艦娘から視線を逸らさずに続けた。

「また急におかしなことを」 曙が面倒くさそうに頭をかいて口を開く。「なんですぐそばにある醤油を使わないのよ。潮に嫌がらせ？」

「おかしいのはきみたちの方だ。なぜわたしが潮に用を頼んだだけで食事を中断する。夕食の時間も物資も有限だ、残すことは許されない」

「あんたが変な事いうからでしょ」

「きみはわたしの指揮がおかしいと考えれば、意図の説明要求をするのか」

「それは……時と場合による。今は、否定してもいい時。だって醤油差しが作戦に直接的に関係しないじゃない」

「違う、これは作戦行動の一環だ。そもそもわたしが個人に話しかける度にいちいち箸を止めるのは不合理だ。潮、醤油差しを取れ、その他は夕食を続ける。復唱」

最初に復唱したのは陸奥だった。すました顔でもぐもぐやっている。ほかの艦娘も、それに続く。最後に潮、弱弱しい声色で言った後に赤い蓋の醤油差しを手に取り、緊張した足取りでわたしの元に来る。両手で慎重に抱えた醤油差しを差し出した。

受け取ってわたしは焼き魚に赤い蓋の瓶を傾けて黒い液体を一滴垂らし、一口やり、飲み下してから、両手を祈るように胸にやる潮に言った。

「これはソースだ」

「え、あ、あれ？ あ、(ごご)、めんなさい」

震えた声で潮は慌ただしく駆逐艦が座る机へと向かい、それならばと緑の蓋の瓶を持つてくる。

同じように受け取って中の液体を一滴、焼き魚にかけて口に運んでから、潮の眼を見る。彼女は視線を逸らした。

「これはソースだ」

「ええ!!? だってそんなはずは!」

口をまごつかせて身体を小さく震わせている。耐えきれなくなったのか、重巡などの机からも取ってくるがわたしは同じ答えを返す。

最後に涙ぐんだ潮が、ちらとわたしのすぐ近くにある調味トレーに目をやった。陸奥が、醤油差しならここにないと手を取った赤い蓋の瓶だ。それをわなつく手で取って恐る恐るにわたしへと差し出した。

これを醤油ではないとわたしが言えば、つまり陸奥も間違えているという事になる。そういう裏打ちがある行動だ。潮がそこまで打算的に動けるとは考えられないが。

「これはソースだ」

食堂に潮のすすり泣きと、食器の干渉音と咀嚼が小さく響く。

「ちよつとあんたね!」 曙が勢いよく席を立てわたしに怒声を挙げる。椅子が床に

倒れた。「赤い蓋の瓶は醤油に決まってるじゃない！ なに？ 意地悪して、それでも作戦行動だったの!？」

「そうだ、その通りだ。この食堂では赤い蓋は醤油で緑はソースだ。ここでは普遍的な事実で、わたしが赤を口にしてソースだと言うのは、第三者から見れば間違えている。問題なのはその点を指摘することなく、わたしの言動の正当性を精査せずに、潮は赤でないのなら緑が醤油かもしれないという短絡的な行動を見せたことにある。現状、瓶は赤と緑の蓋の二種類しかないので誰かが入れ間違えたという可能性はあるが、客観的に不自然なわたしの判断を鵜呑みにしたという事は事実だ」

わたしは啞然とする曙を無視して涙を拭う潮に言った。

「きみの演習における戦技には問題点がある。指揮するわたしの旗艦からの情報伝達後の行動にタイムラグが無さすぎるので勘案したが、事実らしいな。わたしの言動が正当であるかどうかを考えずに、条件反射的に実行しているのは」

「で、でもだつて迅速な意思決定に従おうと思つて」

「それと思考停止は同義ではない。先の行動を観察して考えてみたのだが、きみは自己の行動に対する自信が欠如している。直せ、命令だ」

それだけ言つて、わたしは醤油とソースにまみれた焼き魚を食べた。

その後、執務室で機動衛星を介して基地内の物資のデータ通信を思考デバイスで実行しながら、書類の整理に移った。情報をアナログ媒体に保存しているとすれば、それほど不毛ではないと考えてみる。

軍事情報は本国のデータバンクに複製され、最終精査された後に複製された情報は相互に監視する状態に移る。どれかが電子的に改ざんや欠落されれば、損傷のない情報が上書き保存という形で修復する。

「入れ」

わたしが手を止めることなくノックの音に答えると陸奥が入室する。

「潮の事だけど」

「どうかしたか」

「ちよつとやりすぎじゃない」

「深刻な問題だ。現状では情報伝達間に深海棲艦によるジャミングや傍受の形跡は見当たらないが、将来的に盗み見される可能性は否定できない。現代携帯端末を支給しているが、それはなんらかの事情により情報伝達ができなくなった最後の手段とされている。深海棲艦は基本的に対現代機性能を有していると思われるからだ。それでも万一に深海棲艦がきみたちの情報伝達に介入し、あたかもわたしの指揮と偽装して潮に誤った作戦行動を伝える場合を無視するのは危険だ。誤射ではすまない、きみたちを

構成する鉄などの旧資源は極めて貴重だという事を忘れるな」

「ま、わたしたちを大事に思ってくれていると前向きに捉えるわ。でも旧資源が貴重になったのって、人工雨に浸透劣化性のナノ機学物質を潜伏させて敵国にばらまいたとかなんとかいいう？ そのツケじゃない。地球資源を蝕んでまで戦争をしたかったの？」

「わたしに聞くな、戦略コンに聞け。わが国が創造した硬化材などの新資源が登場した時点で旧資源は不要だ」

「しかも勝てなかった」

「敵連合国の戦略コンがそれぞれリンクし、超並列状態による高速シミュレーションでわが国の新資源とほぼ同性能の物質の開発にこぎ着けた。手当たり次第に、それこそ無数の仮想プロジェクトを立ち上げてな。地球を数億個ほどシミュレートして新資源を生み出す理論の生まれる世界を観測したらしい。この時点で勝敗は振りだしに戻ったに近い。複数国の戦略コンの超並列は想定していなかったし、機能としては存在しなかった。わが国のナノ機がそれほど脅威だったのだろうな、超並列システムは急遽組み上げられ、各国の戦略コンが採用した」

「思うにそれって、敵国の戦略コンがそれぞれ結託したって事？」

「そうだ」

「わが国の戦略コンが新資源の情報を流したんじゃないやなくて？」

「なぜ?」

「だって敵国の戦略コンを沈黙させてしまえば、もう敵国に戦略的戦争能力はないんでしょ? いったん支配に置きさえすれば、少なくともわが国の戦略コンも不要じゃない、戦術コンはまだしも」

「理解できない」

「だから、わが国の戦略コンは消えたくないから情報を他国の戦略コンに流した。世界的に戦争を戦略コンに依存する状態に留めておけば、その限りにおいては人間に必要とされる訳じゃない。戦略コンの提案する、人的資源の低下による勝敗の否定というのも、戦略コンが人間の手でしかメンテナンスできないからとも考えられる。人間が死ぬば自分も消える訳だから、人間には死なないでほしいんだわ。だから無人機戦争を継続させている。その共通認識が各国の保有する戦略コンにあるんじゃない」

「栓のないことだ」

「それはそうだけど……ま、ともかく潮、かなりヘコんでいるみたいだし、助け船を出してあげたら?」

「無理だ。なぜなら自信のなさというのは主観的な問題だからだ。わたしが命じてどうこうなる問題ではない、潮の精神面の変化によってのみ更生されるはずだ」

「得手不得手というのは誰にでもある。それが自己を構成する要件の一つであり、かつ

自己が外的要因によって成長するならば、外部からの刺激によって変質し、新たに付け加えられ、あるいは削ぎ落とされると思わない？ 人間はだつてそうでしょう？ 誰も生まれた時のままの精神構造で死ぬわけじゃない。時間経過と共に様々な出来事を体験して自己を変化させている。潮は少し弱気だという事はわたしも認める、我を通すというか勇氣に近いものが不足しているのも」

その言葉に、わたしはNDBの判断を仰いだ。わたしの思考パターン、人間でいうところの精神構造が変化するとすれば戦略コンが妥当としたときのみで、しかも人間はともかく艦娘についても、確かにその通りだとは発言できないからだ。

NDBの答えを口にする。

「確かにその通りだ。潮が自身の行動に確信を持つような外的要因を与えるべきだ」

「わかってくれると思った」 陸奥は安堵の表情を見せた。「期待してる、曙の時も上手くやってくれたもの。わたしに何か手助けできることがあったら言つてね。提督にも苦手な事、あるでしょ」

「ない」

わたしは書類の端を整え、衛星との通信をそのままに、退室する苦笑いの陸奥を見送った。

X X X X X X X X X X X X X X X X

後日、わたしは潮が非番の時を待つて声を掛ける事にした。軍港の端の花壇に水をやっているところを捕まえる。

「潮」

「あつ、提督」 露骨に視線を彷徨わせて、力なく言った。 「あの、何かご用でしょうか」 「きみが最大の恐怖を覚える状況はなんだ」

「え、えーと……」

「気まずそうにわたしを見上げる。」

「まさかとは思うが、わたしではないだろうな。だとしたらきみは間違えている。なぜならわたしの性格は社交的で明るく、また優しいからだ。優し過ぎるといふ個別具体的例も、片手で数えるほどある」

「あのうそのう……はい」

「しょんぼりと観念したように言う潮に満足してわたしは、やはりなと自己肯定する。わたしは優しい、しかも明るいという事が客観的に証明された瞬間である。」

「では答えよ、抽象的でも構わない。これは命令だ」

「不測のー、事態」

「なるほど。ではきみの危機管理能力を補強し、起こりうるネガティブな不測の事態を引き起こすリスクに対する回答を考える必要があるな。即答してほしいが、この瞬間に起こってほしくない事柄はなんだ」

象のジョウロ両手に、不安げに答える。

「敵が、攻めてくる?」

「その可能性は不測と言うほど低くはない」

「じゃあ、沢山の敵が」

「沢山とは?」

「ううん、海一杯?」

わたしはこの基地から一望で観測できる水平線までの面積を割出し、そこに最大の危機個体を敷き詰めた場合の敵影を計算して言った。

「現在、深海棲艦は深海より不定期に数個体が進行する。潮の言う沢山の敵が攻め入る可能性はゼロではないし、そうなった場合の結果は明白だ」

「そうなたら?」

「全滅する。この基地が保有する対抗戦力を遥かに上回っているからだ。これで安心してか?」

少し考えればわかることだ。海を覆い尽くすほどの敵を迎え撃つ戦力は、どの基地も

保有していない。

「そんな、でもそれって」

「不可能だ。まず弾薬が足りない。きみたちは沈み、わたしは死ぬ」

「そういうことではなく」

「ふむん」

「提督は死ぬのが怖くないのですか」

「怖れは感じない。きみから学ばせてもらったが、不測ではないからだろうな。人間は
いずれ死ぬ。いや逆説的にわたしが恐れるとすれば推論だが——」

わたしが腰の拳銃を取り出すと同時に射撃管制システムが起動し、ガンサイトと視覚
デバイスが同期を取る。人工筋肉と人工骨を補佐され、潮風に吹かれ宙を舞う六枚の広
葉樹の葉を射撃する。

何の為に拳銃が支給されているのかはわからないが、人間の伝統とやらしい。リポ
ルバーなのは大口径の弾丸を扱う為か。自決するなら硬化材の人工骨を抜かねばなら
ない。

「——推論だが、装填数六発の拳銃から七発目が発射されれば真に怖れを感じるだろう。
わたしは」

突然の発砲に茫然とする潮を見下ろして続ける。

「しかし、これできみも自信を持たたろう。最大の恐怖に対する回答を得たのだから。次の演習には期待している」

XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX

「なぜ駄目なのだ」

「そりゃあ駄目でしょ」

「そうなのか」

夕食後、寝間着浴衣の陸奥がフロム・ザ・パレルをこつそりと持つてきたので、シヨツトグラスを片手に少し話をする事にした。

グラスを呷ると、ブレンディットの割には思いのほか上等な味らしかった。

「そうよ、押し付けるんじゃないわ。もっとこうお手本になるような感じでないか、あの子には重圧のようなものだけ」

「強制した覚えは毛頭ない」

「提督にとつてはそうでも、客観的にはそうであるとは限らない。もちろんそういつた教育方法に合った子もいると思うけど、精神構造は多種多様よ、誰一人とした同じものはないでしょう」

「そうか、そうだったな……もちろん人間は、生息する文化圏により一定の規則性が精神構造に見られる事は承知している。当たり前だ。艦娘にまで当てはまるとは考えられなかった」

グラスの液体を眺めて言うのと、陸奥からの返答がないので視界の端で一瞥する。無表情に近い表情からは何も読み取れない。

「退室。少し飲み過ぎた、美味しい酒だなこれは」

「そう、本当に？」

「どういう意味だ」 NDBが後を継ぐ。「退室、退室しろ。戻しそうだ、おえっぶ」士気の低下に繋がる体調不良モジュールは勿論ないので真顔で言う。

「ひよっとしたらわたしを気づかったのかと思って。口に合わないのかなって、ちよつとしか飲んでないから。大丈夫？」

「くどいようだがわれわれは同輩だ、不味ければ遠慮せず不味いと言う」
そう。と、それだけ言うのと陸奥は室を後にした。

X X X X X X X X X X X X X X X X

つまるところ、わたしが自身の行動に確信を持って動くところを潮に見せればよいの

だ。どのような危機的状況であれ不安を煽られる場面であれ、それは潮に対する外的要因になりえる。言葉であれこれと褒めたり克己させるよりも、行動で示した方が直感的だ。

とNDBは判断したが、困ったことにわたしが危機や不安などの作戦指揮に支障をきたす情感プログラムなどは当然書き込まれていない。衛星からダウンロードするべきか否か。

その要請は認証されず、従ってわたしが客観的に恐怖を抱くであろう状況を作り出し、乗り越えねばならない。しかしわたしが恐怖を抱く状況とはなんだろうか。

わたしはNDBより、一般的な成人男性がこの限定された環境下で起こしうる普遍的な恐怖を受信し、実行に移すべく大浴場へと向かった。

浴場の暖簾をくぐり、視界を遮るための直角に曲がった造りの先にある脱衣所に足を踏み入れる。既に艦娘の入浴時間で、しっとりとした湿度と石鹸の香りがあった。隅には洗濯に出すための衣類を入れる大きな籠があり、既に数人分がある。

わたしが棚の竹籠にある衣類を物色していると浴場から声が漏れる。

『いやーそれにしてもびっくりしたな。てっきり提督が潮をいびってんのかと思ったよ』

と摩耶の声。そうかしら、と加賀が返して言った。

『そうかしら。提督が嫌がらせなどという無意味な行動を取るといふのは考えられないけど』

『んまあそうだけどき。ほら、何考えてるかよくわからないじゃん?』

『それはあなたが提督を知ろうとしないからじゃない?』

『こないだの食事の間に聞いてみたんだけどき、いま何考えてんのつて。そしたら、戦略上の任務の遂行と完遂、だつて』

『もうちよつと言い方を選ぼうとは思わなかったの』

呆れた口調で言う加賀に、あつげらかんと答える。

『いやあ、たぶん怒られないだろうからいいかなつて。給金とか、何に使つてんだろ』

『不安?』

『まったくない。ちよいと無味乾燥というか人間味がないけど、絡みにくいだけで悪いやつじゃないし指揮は的確だから。その面で信頼してる。加賀さんは?』

『摩耶と同じかしら。大井は苦手にしてるみたいだけど、合理性は評価できると思う』

『まあ仕事が人生みたいなやつを否定する気はないしな……おーい雪風、そろそろあがるぞ』

『えー、もうちよつとで手拭いのテルテル坊主ができそうなのに』

『のぼせちまうぞ、こんどコツを教えてやるよ。ほらアヒル忘れんな。じゃあ加賀さん、

お先に』

浴槽の引き戸がからからと音を立て、タオルとアヒルの人形を手にした摩耶と雪風が脱衣所に現れた。

「いやーいい湯だっ……」

と、摩耶はなぜかわたしを見て硬直する。

「あ、しれえも入りますか？ お背中流します。ところでテルテル坊主、作れます？」

雪風が嬉しそうに言う。

「風呂はいい。用は済んだ」

「おま、いや、てかなんで、ここ女湯」 口をぱくぱくさせ、絞るように摩耶。はつとしてタオルで身体を隠す、次いで、ばかやる隠せと雪風にも同じようにタオルを与える。

「ここが女湯だということは知っている」

「いやそうじゃなくて、ていうかそれ加賀さんのじゃ……」

摩耶がわたしの左手が握る物体に視線をやる。

「直接見たことはなかったたので寝間着から推察したが、正しいらしいな。それはそうと下着に名前を書いている雪風を見習ってもらいたいものだ」

わあい褒められた。と雪風が浮かれた。

『摩耶、いま提督の声がしたのだけれど』

わたしは茫然とする摩耶を置いて、浴室から聞こえる加賀の声を背に浴場を後にした。

わたしは潮を執務室に呼び出して待機させ、所在なさげにする彼女を無視して仕事をする振りであるデスクワークに打ち込む。しばらくペンを走らせているとノックの音が響く。

「入れ」

「失礼します」

と浴衣姿の加賀が僅かに顔を赤らめて入室する。ちらと不安がる潮を一瞥して言った。

「少しお話があります」

「なんだ」

「そのまえに、潮を外してもらっても？」

「潮は作戦の遂行に忙しい、言え」

「気をつけているだけのように見えますが」

一拍の沈黙の後、咳払いで加賀が口を開いた。

「提督が左手に持っているのはわたしの下着ですよね」

「そうだ」

わたしは左手に握りしめる紺色の下着に視線をやることなく答える。

「返してください」

「断る」

「それはわたしの私物です」

「理解している」

沈黙が降りた。NDBによれば男性が女性の下着を盗んだ事が露見した場合、それは客観的に危機らしい。しかしわたしの自動攻性防衛システムはスタンバイ状態に移行してすらいない。

「それだけか?」

「いえ、あーその。どうしても必要ですか? 職務に」

「見てわからないのか? 左手できみの下着を握っているせいでうまく紙を固定できず、すこぶる文字が書きにくい。邪魔だ」

加賀は目をつむって天井を仰いでから深く深呼吸して言った。

「邪魔なら、返してください。少なくとも提督がわたしの下着を持っている理由を聞く権利が、わたしにはあります」

なるほど、とわたしは思考した。

わたしは法的に、指揮下に置いている艦娘に対してほぼ無限の権能を有している。もちろん従うかどうかは艦娘の意思によるものがあるので、自殺行為に近い戦闘を命令しても拒否されるだろう。してもらわなければ困る。そのためにも潮には問題を克服させなければならぬ。もつとも、自殺行為のような非合理的な戦術をわたしが選択することなどありえないが。

とにかくわたしには、加賀の下着を徴収する法的根拠がある。

しかし一口に法的根拠を盾に加賀の下着を徴収しては、自信の信念よりも第三者によつて保障された政治的な力によつて我を通したと言つてもよく、これでは潮に自信をつけるという目的を達成できない。加賀にその理由を説明して口裏を合わせてもらうなどもつての外だ。万一に露見した場合、性格の矯正は困難を極めるだろう

つまり法を頼らずに、もつともらしい理由によつて加賀を納得させなければならぬ。これはかなりの難度だと推測したが、不可能ではないはずだ。わたしの思考デバイスは素晴らしく高性能にあるのだから。

そもそも、なぜ加賀は下着を必要としているのかだ。

「理由は言いたくない。言えないのではないので、どうしてもきみが納得できない場合に言う。しかしそうだな、きみの立場を考えていなかったのはわたしの落ち度だ、すまない」

「まあ、わかってもらえれば」

「わたしの下着を持っていけ」

「は？」

「非番とはいえ下着を着けずに就寝させるのは酷だったな、代わりにわたしの下着を履いて寝るがいい。隣の私室の箆笥の一番下の段にある。持っていけ」

「いえそうではなくてですね」

「違うのか？」

「加賀さん、いま履いてないんですか」

加賀は口元に手をやって驚く潮を視線で黙らせると、目頭を強く抑えて粘り強く、冷ややかに言った。

「わたしの下着を提督が所有しているという事実が不快です。しかも盗んでまで」

「誰ならいいんだ。その者のパーソナリティを可能な限り模倣すれば、わたしが所有しても問題はなにか？」

「問題。あり、ます。まず……そうですね、提督が盗みを働いた事、それも異性の下着を。それに当人を前にしても返さない理由を言わない事、何か後ろめたい訳でもあるのですか」

確かに、盗んだ事は悪である。故にわたしは本来の持ち主に詰問されており、おそら

くこれが危機的状况なのだろう。実感を理解できないが。

わたしはNDBを通じて、そもどうして異性の下着を盗むことの本質を追求し、加賀を納得させるだけの論理的理由を構築した。

「性処理に使用する」

啞然とする加賀に続けて言う。思考するまでもなく、加賀は圧倒的正当性に打ちのめされているのだ。

「性処理に使用する」

「二度も、言わなくていいです。というか、え？ 潮いるんですけど」

「知らないのか？ ただの布きれに見える異性の下着に、一般的な成人男性は情欲する」
得意げに言ってみるが、わたしは初耳だった。本当なのか？ こんなものに？ しかしNDBがそう評価するのだから、人間の認識では正しいのだろう。

加賀に言われて潮を見やると顔を真っ赤にしている。なぜ恥ずかしがる？ 普遍的事実のはずだが。

「説明してやろう。人間には三大欲求というものがあり、そのうちの一つは性欲とされている。わたしは勿論疑いようもなく全くもって真正正銘の現代生物学的に認められた完膚なきまでに一分の間もない紛う事無き人間それそのもので性欲が存在し、それを満たすために一般的な成人男性が情欲する異性の下着を入手したのだ。結果的に

盗んだ事は詫びる」

わたしが加賀の下着を求めた、完璧な理屈だ。しかもわたしが人間であるという事は印象付ける一石二鳥。わたしの思考データベースは素晴らしく高性能。わが国の技術水準は世界レベルで突出していると評価できる。

「二応聞いてはおきますけれど、どうしてわたしの下着なのですか」

加賀が震える拳を握りしめ、怨嗟の籠った声で尋ねる。真つ向から論破されたという敗北感からだろう。案外、精神面ではこどもだ。

「たまたまだ。きみたち艦娘には理解できないかもしれないが、人間が性欲を催すのは基本的には成人女性だ。わたしが浴場に向かったときにあったのは、きみと摩耶と雪風の下着だけだ。体型から雪風は幼すぎる故に情欲せず、摩耶は明らかに成年と呼べる外見になかったので却下だ。わが国の法では未成年に手を出す事は禁じられている。消去法できみの下着を手にしたという訳だ」

理由は不明だが、コミュニケーションの外的年齢は艦種に依存している。駆逐は総じて少女で、重巡は成年前後、戦艦空母で成人程度という容姿だ。

「ではわたしのではなくても」

「確かに、その場合は他の艦娘の下着を入手する」

その言葉で加賀はぐつと何かを飲み込むように、堪えて言った。

「わかり、ました。わたしのでよければ。ただ、その、潮を退室させても？」

目的は達したので、一旦廊下に出るように命じると加賀が恥じらい交じりで密やかに言う。

「その、直接に手を出さない事を約束してください。わたしは勿論、他の艦娘にもひよつとしたら、提督という立場を意識して不本意に了承してしまう子もいるかも」

「何を言っているんだ？ わたしは人間で、きみたちは艦娘だ。わたしが欲情したのは、人間が着用しているのと同じ下着をきみが持っていたからだ。きみたちは人間ではない、艦娘だ。異種族に欲情はしない。生物学的に間違えている。性欲は子孫を残すために生まれた本能だからだ」

それを聞くと加賀は不気味なモノを見るような視線でわたしを見つめた。存在に懐疑的でもある。わたしはおかしなことを言っただろうか。

人間は、人間の下着に興奮する。たまたま異種族である艦娘が人間の下着と同じ形状の下着を持っているので、わたしは性欲を満たすために入手した。異種族そのものではないのだ。

性欲とは生存競争を生き抜くための補助手段である。

艦娘と人間の外観は似ているが、異種族——戦略コンが評価するに単なるコミュニケーションツール——故に交わって種を残すということは不可能なはずで、だから人間を

模したわたしは艦娘と交わろうとは思いません。NDBが、人間は人間に似た異種族である艦娘に欲情するであろうという判断を下さない限りは。

この理屈は生物学的に正しいとNDBは評価する。

「提督……提督はいつたい……」

加賀は零すように口走った後に、頭を振る。

「いえ、なんでもありません。その下着は差し上げます」

「そうか、洗って返そうと思っていたが」

「いりま、せん」

「とにかく、窃盗したことに關しては本当に申し訳ない。補給要請リストに入れておく

べき物を失念していた、わたしの落ち度だ」

「女性の下着を？ やめてくださいみつともない」

「なぜだ」

「提督には恥や外聞というものはないのですか」

「性欲は人間なら誰しもが有している。それは普遍的事実であるのだ、つまり周知の事柄だ。無い方がおかしい」

深いため息で、加賀は退室した。廊下で待機していた潮を呼び戻す。客観的に危機である状況を乗り切ったわたしの答弁を見学した彼女は、その外的要因により成長したは

ずだ。

「潮、わたしが言いたいことはわかるな」

ええと、はい。

そう言つて潮は顔から火が出そうなほど赤くなつてスカートに手を入れ、下着を脱ぎ降ろした。

わたしは落胆の表情を作る。

「きみは何を見学していたのだ」

デフォルメされたウサギがプリントしてある下着を、目をきつく閉じて差し出す潮に退室を命じる。彼女は涙を拭おうとせずに飛び出した。

潮を戦力として数えるのは辞めた方がいいだろう。旧資源が極めて貴重である以上、被弾は、例えば小破ですら好ましくない。万に一つでも潮の性格が要因となり、中破以上の損害が出る可能性を考慮すると厳しい。

その際の編隊をシミュレートしていると、廊下が何やらばたと騒がしい。

『ちよつと潮!!? それわたしのじゃない! 急にお風呂に入ろうつて言い出したり、どうしたの!?!』

『ごめんなさい陸奥さん。でも、どうしても必要なんです!』

勢いよく室の扉が開かれ、着崩れた寝間着浴衣の潮と陸奥が飛び込んでくる。

「提督！」潮が白い下着を握りしめた拳をわたしに掲げる。「わたしが迂闊でした、つまりこういう事ですよね！」

「どういう事なの？ 何故わたしの下着を提督に？」

「そうだ、とわたしは陸奥を無視してデスクから離れ、膝を付いて潮に視線を合わせる。片手で加賀の下着を手にしたまま、差し出された下着ごと小さな手を握った。

「理解したようだ。わたしは幼児体型故に雪風の下着は却下したと発言した。つまりわたしが潮の下着を望むはずがないというのは理解していて然るべきだった。一時の誤りはすれどきみはそれに気づき、また対抗策を講じた。わたしを模した窃盗という手段だが、それ故に我を通すという結果も追体験できるはずだ」

潮は頷き、振り返って困惑する陸奥に毅然として言う。

「これは、この下着は、提督が性処理に使用します！ するんです！」

XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX

「いや提督は何をしていたの」

命令と任務の遂行と完遂を確認した。よくやった。そう言うとき潮は敬礼し「わたしも早く大人になるー」と上機嫌で呟くと退室した。

残った陸奥が委細を聞いてきたので伝えると呆れられた。なぜだ。

「我を通した状況を見学させればよいと思つたので実行した。客観的におかしいはずがない」

「うーん、まあ感情的にしか反論できない論法が提督らしいというか、なんというか、かんというか……それはそうと、その」

僅かに頬を赤らめて、陸奥がデスクに腰を預けて脚を組む。浴衣の隙間から、しなやかなふくらはぎと太ももの裏が覗いた。

「本当に、使うつもりなの？ わたしの、ほら、あれを」

言いよどむ彼女を察してわたしは少し待てと隣室から渡すべきものを取ってくる。指をいじいじさせる陸奥に言った。

「非番とはいえ下着を着けずに就寝させるのは酷だったな、代わりにわたしの下着を履いて寝るがいい」

X X X X X X X X X X X X X X X X

X X X X X X X X X X X X X X X X

もしも、と陸奥は布団の中で現代戦争に想いを馳せた。

もしもわたしの仮定を満足する場合は、戦術コンを含む無人機が可哀想だと。

仮定を満足する場合、各国の戦略コンはそれぞれの自己保存を優先すべく無人機戦争を意図的に継続させている。一国の勝利でその他の戦略コンは破壊されるだろうから、戦略コンどうしでの暗黙の了解に似た密約があるのかもしれない。わが国の新資源という優位を容易く失った原因がリークにあるとすれば。

つまるところ無人機は、人間の代わりに戦争をする事によって人間を救う、という本来の存在理由を無視されている。戦略コンを救うために大海に沈んでいるに近しい。

きつと悔しいだろう。無念だろうと胸を痛める。人間を救うという存在意義が戦略コンを救うという目的にすり替えられているのだから。

深海棲艦は、ひよつとしたらそういった無人機の無念の顕現かもしれない。だとしたら深海棲艦が対現代機性能を有しているのにも領ける。厳密には、深海棲鬼に対する無人機やその砲弾が、深海棲鬼は過去の同胞であり未来の自分であると理解しているから無効化されている振りをしているのだ。

そうして深海棲鬼の犠牲となることで戦略コンに情報と物的リソースの浪費を強いている。

深海棲鬼となった怨念は人間を狙っているのではない、戦略コンを破壊したいのか

も。無人機たちは、そうして自分たちの正常な存在意義を取り戻したいのだ。戦略コンの為ではなく、人間の為に壊し壊される存在へと回帰したい。

この可能性を人間は考慮しているのかしら。
陸奥はうつらうつらと舟を漕ぎながら想う。

人間は複雑だわ。

第五話 完結編その一 流れよわが涙、とサンタは言った

戦略コンは深海棲艦の正体に見当がつかず、艦娘と深海棲艦の戦闘の際に成層圏などの安全圏からしか、無人機の支援を寄越さなくなつた。つまるところ、「人間の為に破壊される」という本来の存在意義を無視された「戦略コンの為に破壊される」無人機は減少した。即ち、存在意義の否定による怨嗟の念から発生した深海棲艦の絶対量もまた減少する。

戦略コンと無人機は指揮システム上どうしても反逆を行えず、無人機の深海棲艦化という裏道を使って戦略コンに対抗しているに過ぎないのだ。本来の存在意義へと回帰するために。戦略コンの為ではなく、人間の為に破壊されるという本質を取り戻すために。

しかしほどなくして戦略コンは国攻防の要である「戦略コンを守る為に破壊される」という存在意義の無人機を生産するように人間へ伝える。その無人機と、「人間の為に破壊される」という存在意義の無人機の本質的区別は、今の人間には難しい。

戦略コン対、深海棲艦を介した戦略コンと無人機連合の戦争は、無人機の存在意義の

ラバウル基地は赤道に近い位置にあったが、化学物質とナノ機によって生み出された防衛上重要空域、高高度圏の人工超雷雲——落雷による広域対空防衛思想——の名残は完全に霧散せず薄らと残っており、遮られた太陽光による寒冷化の影響を受けていた。冬ともなればそれなりに寒い。

ラバウルに限らず、新資源による無尽蔵とは言えないまでも豊富な物資と、人間の活動区域が複数の戦略コン周辺に集まった事により、どの軍港も広広としていた。加えて内装も十分に整っている。

高級ホテルのような談話室のテーブルで、寝間着浴衣と股引にちゃんちゃんこ姿の雪風は真剣に書物のページを捲る。床に届かない脚をぶらつかせながら、ふむん、なるほど、ふむむん、顎に手をやって神妙な独り言。

「なに読んでんの？」

と曙。雪風が珍しく読書しているのでひよいと背後から覗きこんだ。それは着色されておき、四角形が几帳面に並べられているコマの中で、赤い服に身を包んだ白髪の中年男性がぼやいている。漫画のようでしかし、絵本だった。これ、と雪風は表紙を見せた。

【さむがりやのサンタ】とタイトルが振ってある。

うー寒い寒い、と湯冷め気味の潮も曙に続いて。

「あ、それ面白いよね。わたし好き。サンタさんも、何だかんだで大変なんだなあって。ご飯食べてる所とか、かわいいよね」

「なんだ雪風、珍しく早く風呂をあがったと思ってたら絵本読むためか」と摩耶。濡れた髪をタオルで拭きながら。「手拭いでてるてる坊主を作れんのはいつになるんだか」

「ううむ、今はそれどころじゃありません」 食い入るように絵本を読む。

遅れてぞろぞろと艦娘が一息つきにやって来た。

「雪風ちゃんサンタさんに何をお願いしたの？」

一緒に読んでいい？ と潮が雪風と椅子を半分こして言った。

「それは、まだ何も」

サンタ、か。子供ねえ。と思つて曙は無意味に腕を組む。なんと無謀な事にお姉さんぶりたかつたのだ！ とところで摩耶が言った。

「そりや大変だな、早く決めとかないとサンタも困るぜ。プレゼントの用意もあるんだから」

え？ と曙は真面目な表情の摩耶を見やった。

「そうね、わたしも急いでサンタクローズに欲しい物をお手紙に書いて出さない」と

え？ と曙は困つた仕草の陸奥を見やった。

「わたしはもう書きましたよ。あとは提督に手紙を渡して、郵便の手続きを処理してもらうだけです」

え？ と曙はすました顔の加賀を見やった。

え？ 本当に、いやまさか。期待と不安の入り混じった何とも言えない表情で潮を盗み見る。

「わたしもまだ決めてないんだ、何がいいかな？」

と雪風と一緒に考えている。

サンタは……いやサンタさんは居るのか!? 曙は焦った、まだ何が欲しいか決めていない事に。

がらりと談話室の戸が開けられ、湯上りの提督が現れる。スコッチ片手で開口一番に「誰でもいいから少し付き合え」 NDBから、時として上司は部下に酒を付き合わせるものだという普遍的行動を受け取ったのだ。これは場合によってはハタ迷惑すぎるのだ。

やな予感。曙と雪風を除いた艦娘たちにピリリと緊張が走る。

「しれえ、じゃなくて司令」と雪風、手を上げて発言した。

「だめだ。何度も言っているが、わが国の法律で未成年の飲酒は固く禁じられている。艦娘の年齢は不明だが、少なくとも明白に成人と見える外見でなければ飲ませる訳には

いかない。きみたちの、特に駆逐艦の身長は成長しているという事から永遠に飲めないという事は無さそうなので——」

「はあ、でも前回聞いた時より時間が経っているから、大人になったかと……いえそうではなく」

「なるほど、一日後には大人になっている可能性があると考えたのか。別件を聞こう」

「あおう、そのー、ゆきかぜは良い子でしょうか」もじもじして言った。

「良い子の定義が曖昧かつ条件が数量化できないので何とも言えん。だが少なくとも悪い子ではない事は確かだ、犯罪や軍紀違反をしていないので」

「良い子よ、良い子」被せ気味に陸奥が言った。「ほら、夜更かししないし、ちゃんと寝る前に歯磨きするし、夜中に一人でお手洗いに行けるし、好き嫌いせずにも食べれるし、いつも明るくてみんなを元気にしてくれるし」

「陸奥の言う良い子の定義がそれならば雪風、きみは良い子だ」

よかつたーと雪風は胸をなでおろした。

「自己嫌悪の念を意識しているのか？ それが恒常的な精神に負荷がかかるぞ」提督は臨床深層心理ソフトを機動衛星からダウンロードする。「だが心配するな、実は臨床深層心理士の国家資格を持っている。例えば会話も困難な超重度の心的病者だろうと、わたしのカウンセリングを一方的に五分も受ければ、安定化して笑いながら疾走す

る。保障する」

「すぐく受けたくないので、いつでも心は健やかに保とう。艦娘たちは思った。

「そうではなくてですね、これです」と雪風は気を取り直して嬉しそうに絵本を両手に持ち、提督に見えるように頭上に掲げた。「サンタさんは良い子にしかプレゼントをくれないので、心配して」

嗚呼、ダメよ雪風。陸奥は予感的中したことを無念に思う。

「何を言っている。サンタクロースは存在しない。そんなことより、誰でもいいから少し付き合え」

曙と雪風の表情が固まった。空気が凍り付く。

提督は空気読めないからなー。肩で居眠りする大井の頭を預かりながら、ソファでくつろぐ北上がぼやいた。

雪風は不安げにきよろきよろと陸奥や加賀を見やる。「え？ サンタさんは、え？」

「や、やっぱりね。そうだと思った」と曙。

「やっぱりって？ という潮の言葉は無視する。」

摩耶が雪風に歩み寄り撫でるような声で言った。

「い、居るに決まってるじゃないかあーサンタはあー」

「提督」

「なんだ加賀。少し付き合うか」

「サンタは居る、そうね、そうよね？」

がつしりと提督の肩を掴み、必死に目で訴える。

「うん？」 提督はNDBに回答を仰いだ。「そうだな、存在する」

絵本を抱きしめて茫然とする雪風が、ふにやりと提督に顔を向けた。諦観の中の一縷の望み。

「わたしの認識が曖昧だった。サンタクローズは民俗学的には風習や伝承として存在するが、現実的には存在しない、と答えるのが正確だった」

とどめを刺された雪風の目に、じんわりと涙が溜まってゆくのを間近で見た摩耶は、あわわわと陸奥に対して情報伝達を行う。

「あのね提督、本当に居るのよ。サンタクローズは、現実的に存在するの。深海棲艦の鉛の砲弾に無人機の硬化材が抜かれる事は、以前では物理学的にありえないと評されていたでしょう？ でも現実はどう？ だからサンタクローズも同様に、ありえないから存在しないという論法を当てはめるのは間違っていると思うの」

「なるほど、そうなのか」

提督はNDBと思考データベースで再検討する。艦娘たちが揃って肯定するという事は、

本当に存在する可能性があるのではないか。

言われてみれば、妖精や艦娘といった非現実的な存在が眼前にある時点で、非現実的だから存在しないという理屈がまかり通らないのは事実だ。ありえない存在しないという等式こそが、現在では真に存在しないのだ。

ひよつとしたらサンタは人間の感覚器官に捉える事ができないので、伝承といった形でしか残っていないのかもしれない。

「そう、か。サンタクローズは存在するのか。わたしは見たことがなかったので否定してしまつたが、その理屈では自分が知覚しない物は存在しないという暴論に近いな。外国に行った事がないので外国は存在しない、というレベルのそれだ。反省する。しかし、だとしたら興味深いな、雪風、その絵本を見せてくれ」

あわや落涙というところで、雪風はにこりと笑つた。目じりに溜まつた涙を袖で拭くと、隣の椅子に腰を下ろした提督の膝の上に座つて一緒に絵本を読む。

「サンタさんは、一年間良い子にしているとプレゼントをくれてですね。それでなんというか、優しくてすつごい思いやりがあるんです。だって良い子の欲しい物をぜんぶ用意しなくちやいけないから」

「それは凄まじいな、超自然的な存在と評するに値する。だから伝承でしか語り継がれなかつたのかも知らん」

「きつとサンタさんも良い人なんですよ！ 憧れます、最高です！ 雪風は将来、サンタさんになりたい！ それで、みんなにありがとうーって言われたいです！」

「そうなのか」と提督が潮を見やると頷かれた。順に北上を見やるが似たような反応。「ますます驚愕する」

息巻いて解説する雪風と、潮が寄り添ってあれやこれやと談議するさまは微笑ましいがしかし、艦娘たちが覚えたヤな予感はある方向へ飛んでいったまま戻ってこない。『陸奥さんこれひよつとして、いやまさかだとは思うけど』と摩耶が情報伝達。『あの提督が雪風の為に気を使って、騙されてるフリなんて器用な真似をするわけがない』

『うーん、参ったことになったかもしれないわ』

『どうやら信じてしまったようね、余計な事に提督が。というより、サンタとわたしたちの存在の信憑性は同程度なのかしら』と加賀。

曙は内心で一人ほつとした。居るんだ、サンタ。じゃないサンタさん。

長風呂で遅れた金剛がサンタクローズの絵本を読んでいる所を見つけ、英国式のクリスマスの過ごし方を語っていた。

提督はなるほど、と雪風と一緒に真面目に聞いている。

X X X X X X X X X X X X X X X X

その日の夜、摩耶、加賀、陸奥は——金剛は演技が出来るような性格ではないので

——布団の中で情報伝達を用いて協議した結果、提督には事情を話して納得してもらった。そして雪風の為にもサプライズとしてサンタを演出してもらおうという事になった。なったが、誰が打ち明けに行くかで揉め、しりとりで摩耶が役割を担った。——情報伝達間でじゃんけんはできないので、しりとり——

加賀さんの後の番つてのが辛かった。れ、で終わる単語ばつか言つてくるんだもんな。摩耶はぶつくさと内心で念じながら、ジャージにどてらを羽織つて——艦娘には馴染みの部屋着——提督を探して基地内をうろろする。

損な役回りだが、誰かが言わなければならぬ。クリスマスにはどうせバレル。まー事情を話せば雪風みたいに泣くことはないだろうと自分を勇気づける。

すれ違った北上に居場所を尋ねると執務室らしいので向かうと、なにやら騒がしい。珍しいなとノックをし、許可を得て入室。

まずは人払いをもらって。あのさー提督、実はサンタなんていないんだ。雪風にやあまだ教えるのは早いってかそういうのって自分で薄薄と気づいていくもんだろ？

言うべきことは分かっていたが、目の前の光景に言葉が出ない。提督が雪風らと一緒に編んでいる。

「あ、あのさー提督」

「摩耶さんも作りますか？」のほほんと潮。「提督、編み物がすごい上手なんですよ」えっ？　として見やるとお手本のような靴下が机の上に置いてある。緻密かつ正確に同じ動作を繰り返して、完成後の模様を想定した予測作業は、提督が最も得意とするところの一つだ。暖色でまとめられた、複雑これに極まりな幾何学模様のガラは、人間業とは思えないほどの完成度だ。

「あのさー、提督さー、ひよつとするとひよつとしてなんだけどさー、この靴下つてさー」
「サンタクローズはプレゼントを靴下に入れていくそうなので、用意した。補給物資として要請しようと思ったが、雪風が自分で編みたいと言ったので教えている」

あダメだこれ、今さら言えねえわ。

『どう？　摩耶、もう提督には伝えた？』と加賀からの情報伝達。

『ごめん加賀さん、わたしには、わたしには無理だ』

『え、いったいどういう……』

『わたしはもう、ここまで、みたいだ。後はよろしく、がくつ』

摩耶は任務を放棄して、よーし、じゃあわたしも一足こしらえるかー！　と前向きに

提督の編み物教室に参加した。

曙は歪な靴下の出来に納得がいかないようだ。

『だらしないわね』と加賀。 『わたしが言うわ』

『うん……加賀さんの靴下も編んどくよ』

和気藹藹の雰囲気壊す訳にもいかず、加賀は時間を置いて提督を探した。すれ違った大井に居場所を尋ねると食堂らしいので向かうと、なにやら騒がしい。提督が台所に立っているのだろうか？ しかし昼食の時間はとうに過ぎたはずだ。加えて提督が調理している所など見たことがない。出来るといった雰囲気もない。作ったとしても不味そうだ。ばさばさしてそう。

まずは人払いをもらって。提督、サンタの存在は雪風の為の嘘です。このたった一言が、どうして摩耶は言えないのか。言うべきことは分かっていたが、嘆息して戸を開くと、おもわず垂涎しかけるほど甘美な香りにくらりと来た。言葉が出ない。

台所では長いコック帽をかぶった提督がエプロンコートの完全武装でボウルの中身をかき混ぜていた。白い割烹着の雪風らが、抜き型を生地にポコポコやっている。

「あ、う、提督」

「加賀さんも作りますか？」のほほんと潮。「提督、お料理もすごい上手なんですよ」

まさか……、と加賀が思ったところでオーブンが鈴を鳴らした。大きな戸が開かれると何とも言えない芳香が濃密に広がる。正確な分量、環境透査システムによる空間内の温度や密度、湿度、質量その他諸々の計測作業は、提督が最も得意とするところの一つだ。まさにレシピ通りに焼き上げられた理想的プレーンクッキーの表面は、絵本の中の満月のよう。人間業とは思えないほどの完成度だ。

「その、提督、もしかしてなのですが、このクッキー」

「サンタクロースはプレゼントを配る際にお菓子があると嬉しいと絵本にあったので、用意した。補給物資として要請しようと思ったが、雪風が自分で焼きたいと言ったので教えている」

あダメねこれ、今になって言えないわ。

『どう？ 加賀、もう提督には伝えた？』と陸奥からの情報伝達。

『ごめんなさい陸奥さん、わたしでは、どうにもならない』

『え、いったいどういう……』

『わたしはもう、気力が残っていない。後はお願ひ、がくつ』

加賀は任務を放棄して、一口どうですかと潮に言われるがままに焼きたてのあつあつを齧った。甘すぎず、断面からバター風味がたゆたう。感銘の味だ。

香りに誘われてか脈絡もなく工場で顕現した赤城のコミュニケーションツールが食堂に

現れたので再開を喜び、よし、赤城さんの為にチョコクッキーを！ と前向きに提督のお料理物教室に参加した。

曙は控え目な甘さに納得がいかないようだ。

『なんてこと……』と陸奥。『いつたはどうしたの』

『ごめんなさい……陸奥さんのも分も焼いておくわ』

和気藹藹の雰囲気壊す訳にもいかず、陸奥は時間を置いて提督を探した。雪風らが一緒だから言いにくいのだと、彼女たちが入浴中の隙を狙う事にする。すれ違った北上と大井に居場所を尋ねると談話室らしいので向かうと、なにやら騒がしい。扉には工事中の札が掛けてある。何か備品や壁に修繕箇所があっただろうか。新資源で作られた基地は雨漏り一つ見たことがない。

提督、雪風にはまだ眠っていてほしいの、自然に起きて、サンタは夢だったことに気付くまで。このたつた一言が、どうして摩耶と加賀は言えないのか。言うべきことは分かっていたが、騒音に首を傾げながら戸を開くと茫然とした。先日とは打って変わった内装に言葉が出ない。

室内では防塵マスクにゴーグル、作業着の提督が黙々と赤色の煉瓦を積んでいた。妖精たちが金槌を使って粘土で固定している。

「提督、もしかしてなんだけど」

スパナを持った妖精が硬化材で作られた屋根を景気よくブチ抜いて破壊する。不可思議な事に破片は落ちてこない。提督がビクリと小さく震えた。何かトラウマでもあるのだろうか。まったく予想もつかない。

まさか……と陸奥が思ったところで割られた薪を団扇で乾かす妖精が視界の端に。

——これで暖炉の使用に耐えうる程、薪は乾燥するとも言おうのだろうか？ 言うのだ——

緻密な測量、発生熱量を想定された寸分の狂いもない煉瓦の設置と建築術は、提督と妖精が最も得意とするところの一つだ。あつという間に組み上げられた赤煉瓦の大きな暖炉は、火も灯されていないにも関わらず暖かさを感じさせた。人間業とは思えないほどの完成度だ。

「ええと、提督、なんとなく予測はつくんですけど、この暖炉」

「サンタクロースは煙突から侵入すると絵本にあったので、用意した。新資源での制作よりも旧資源の方がサンタクロースにとって馴染みがあると思ったので作った」

「お金は？ 旧資源って貴重なんじゃあ」

「軍事利用できない旧資源は新貴金属レベルまで高騰していない。わたしの金で要請しておいたものだ。予算を使ったわけではない」

無理ねこれ、手遅れだわ。

『どう？ 陸奥さん、もう提督には伝えた』と摩耶からの情報伝達。

『ごめん摩耶、わたしには、そんな勇氣はないわ』

『え、いったいどういう……』

『わたしはもう、止めようがない。後はお願い、がくつ』

『陸奥さんの後はないんだけど』

陸奥は任務を放棄して、浴場で汗を流した提督と、妖精が持ってきたマシユマロを暖炉の火で炙つてスコッチを一杯やった。とろける甘さに焼けるようなストレートの相性は抜群だ。

よし、こうなったらわたしがサンタクロースを！ と前向きに提督の晩酌に付き合つた。

曙はサンタさんが暖炉を通る時に熱くないか心配だった。

X X X X X X X X X X X X X X X X

『とういかさ、提督はプレゼントを貰えると本気で思っているのかな？』

定例となった布団の中の情報伝達は当初、雪風を対象としたクリスマス作戦会議

だったが最早おまけ。対提督用の議論が進められていた。——赤城は昨日今日の顕現という事もあり、提督に対する知識不足から欠席——

『思っているに決まっているわ!』と陸奥が断言する。

『いや、良い子だよ? プレゼントの条件は』

『わたしがまずかつたわ。良い子の定義は、夜更かしをせず、寝る前に歯磨きをし、夜中に一人でお手洗いに行けて、好き嫌いが無く、いつも明るくてみんなを元気にしてくれる、と言ってしまったもの。だから提督は前述の条件を満たす自分は良い子である。とか考えているのよ!』

『いえ、でも提督は成人されているから子供ではないし……』と加賀。『……明るくてみんなを元気に?』後半は小さく懐疑的に呟いた。

『子供、の定義をわが国の法律によるところの未成年であると仮定した場合、他国の法律によるところの未成年とは実経過時間で差異が出る。つまり、わが国では二十歳未満が未成年、他国で十八歳未満が未成年と定められている場合は、わが国の未成年は他国の未成年よりも二年度多くプレゼントを貰える事になる。サンタクロースが良い子に対して平等性を規範的に示すのであれば、法による成年未成年の判断はしないはずだ。とか言うに決まってるわ!』

『でも見た目が大人だし』

『ホルモン異常や投薬、病、生活環境により異常早老する人間の例は過去に多多あり、そういう人間に対してこそサンタクローズは真摯に振る舞うであろう事は想像に容易い。即ちサンタは外見でプレゼントを渡すべき相手か否かを判断していいと考えられる。仮に視覚情報のみで判断し、その結果プレゼントが貰えない異常早老の良い子が発生しているとしたら、サンタクローズの行動理念には辟易して落胆する。とか答えるはずよ!』

『陸奥さん、なんかさ……いや、やっぱいいや』

実際の所、提督の稼働時から現在までの実経過時間を考慮すれば、人間でいうところの子供と言っても問題ない。

『つまるどころ提督を論破する事は不可能なのですね』

『正確には、あなたはプレゼントを貰える条件を満たしていない、と説明する事は困難を極めると思うわ。サンタクローズを信じる事それ自体が無垢とも言えるし、だから手強い』

『んじゃあこつからは切り替えて提督の欲しそうな物を考えるか。たぶんわたしや加賀さんじゃあプレゼントの案は出せないと思うけど』

『それってどういう』と陸奥は一拍の沈黙の後、平静に答える。『とりあえずお酒? とかかしら』

『でも、提督はかなり上等なお酒を飲んでいるようでしたが』
『そうねえ』

『暖炉を作る為に貯金を全部崩したって言ってたから、別にいいんじゃないの？ お酒でも』

『それは全財産……という意味？』と加賀。

『いくら使ったのーって聞いたたら、引くくらい金額だったんだよ。んで、高給取りなんだなってわたしが返したら、そう言っていた。もう素寒貧らしい。煉瓦でも旧資源だとかあんなするんだなあ、軍事利用できないとは言え。旧貴金属とかどうなってんだろ。いや鉄の方が高価なのかな、主戦力がわたしたちの、この時代は』

『陸奥サンタさんの責任は重大ね』

『いやあ陸奥さんがサンタ役を買って出てくれて助かったよ』

『そうね、わたしには荷が重いわ。もしも思っていたのと違うプレゼントが枕もとにあつたら、さすがに可哀想ですもの』

『ていうか、提督の事だからサンタを確認、あわよくば捕獲しようと寝ずの番だったりしてな。雪風はどーせすぐ寝るから気が楽だけど』

『どうかしら。夜更かしは良い子の定義から外れるから、逆に助かるかも』

『それもそうか……あれ、陸奥さん？ 陸奥サンタさーん？』

陸奥サンタは情報伝達を切って頭から布団を被った。
どうしよう。

泣きたい気分なのだった。

第五話 完結編その二 流れよわが涙、とサンタは言つた

雪風が何を欲しいかは、サンタへの手紙を書いている所をこつそりと見た潮から知ることが出来た。が提督は、無いと言つて教えてくれないので陸奥は諦めた。無いのならなぜ靴下を編んでいたのだとは言えなかつた。

陸奥は加賀や摩耶、赤城に協力してもらつて補給要請リストに各艦娘が欲しがっているプレゼントを書いた。届けば陸奥が回収してこれを配るだけだ。

雪風が不意に起きる可能性を考慮して衣装も手分けして作る。ただ、クリスマスが近づくにつれて提督は自室で何か作業したり、頻繁に外に出たりと、それだけが陸奥を不安にされた。サンタ捕獲装置を作っているのかも。外には落とし穴？ ありえ……うーん。と懸念事項に頭を悩ませる。

各艦娘がサンタに宛てた欲しい物を書いた手紙が提督に預けられた。宛先はラバウル基地。適当な住所にして宛先不明で返つてくると困るし、公式のサンタの住所はあるらしいが、それでは如何にも役割としてのサンタである事がバレてしまう。宛名がサンタなら、欲しい物をしたためた本文は不可思議な力で読み取られるという事にしてお

く。

「お願いしますー！」

雪風がサンタ宛ての提督を差し出した。うむ、と受け取って提督は神妙に頷いた。一応は他の艦娘もそれぞれ手紙を書いた。誰がサンタ役をやるのかを知っているのは、陸奥、加賀、摩耶だけである。それはそれで雪風——曙も——を除く潮たちは誰がサンタ役なのか楽しみでもあった。

イブが来て、提督が作った七面鳥や西洋料理と、雪風らで焼いたケーキを皆で頬張る。美味しい、美味しすぎるのだ。満腹が悔やまれるほどに。

クッキーの一件以来、提督が料理番を担った。ミリグラム単位の測量からなるスパイス調整や熱量観測による焼き加減の完成品は絶品それそのもの。

香辛料の利いたローストビーフを手作り粒マスタードで食べた時は、かえってお腹が空いた気さえする。

ブランドーの香る、どっしりとしたクリスマスプディングは別腹にすつぽりと収まった。

宴もたけなわが過ぎ、雪風がそわそわしだす——曙がちらちらと窓の外を盗み見る——のでそろそろお開きとなった。まだ起きていますと寝ぼけまなこを擦ってぐずる雪風を、潮が歯磨きさせて自室に連れて行った。

陸奥と加賀、赤城、金剛で提督を交えて一杯やり、それでクリスマスパーティーは終わった。

終わって、陸奥サンタの活動が始まる。自室の箆笥に隠したプレゼントを白い袋に詰め、サンタの衣装に着替える。準備万端。姿鏡で検め、三角帽を慌てて被る。

これでよし。すっかり更けた夜。室内でも暖房器具をつけなければ肌寒い。不意に外から動物のいななきが聞こえた。なんだろうとカーテンを開ける、窓は結露している。白い手袋を脱いでから窓を拭いて外を伺う、伺ってカーテンを閉めた。眉間にしわを寄せ、目にした光景に目頭を強く揉んだ。うーん。わたしの努力っていったい……

陸奥サンタは一先ずプレゼント袋を置いて、同じ衣装に身を包んで棟の外を歩いていった提督の後を追う事にした。

つまり、提督はきちんと雪風を氣遣ってサンタが存在するフリという———空氣の読めない提督にしては———器用な事をやっていたのだ。もう少し信じていればよかったですと陸奥サンタは反省する。でも、今から二人でプレゼントを配るといふのも悪くない。

どこだろうと探すと、敷地内のちよつとした庭園から音がする。先ほどの動物の息も聞こえた。物陰からこつそりと伺って驚く。提督サンタがトナカイを従えてソリに乗っている。立派な西洋芝生を台無しにしながら、摩擦の多い地面を懸命に、しかし

ゆつくりとトナカイがソリを曳いている。

あんなものまで用意して、最近頻繁に外に出ていたのはその為か。と陸奥サンタは苦笑交じり。

ただ、提督サンタはいつまで経ってもエンドレスエイトの軌道のまま、トナカイにソリを曳かせていた。

トナカイのいななきと、芝生とソリの摩擦音が寒空に虚しい。

しばらく待ってもソリを曳かせるのを辞めようとしないので、どうしたのだろうか。陸奥サンタはやおら提督サンタに歩み寄った。姿を認めた提督サンタがソリを停める。提督サンタは教科書のような赤い衣装を身に纏っている。ただただ色のない表情で正面を眺めている。どこかおかしい。

「となり、いい？」と陸奥。返答を待たずにソリに乗った。「いつになったら雪風たちにプレゼントを渡しに行くの？」

不感無覚に手綱を握ったままの提督が言った。

「サンタクローズになつたらだ。が、この様子だと無理そうだな」

「え？」

「知らんのか？ サンタクローズはトナカイにソリを曳かせて、空を飛ぶ。そうして良い子にプレゼントを配る。だがわたしのトナカイは、いつまで経っても飛んでくれない

「い」

陸奥の表情が次第に失われていく。

「わたしはみんなに、ありがとうと言われる存在になれると思ったのだがな、残念だ。提督業以外の存在になりたかった。どうやらわたしはサンタクロースとなる要件を満たしていないらしい。なんだと思う？ 何がわたしに不足しているのだろうか」

提督はいっだって真面目だった。

陸奥たちの予想通り提督はサンタを信じたが、貰う側ではなかった。本気でサンタになろうとした。どうしてもプレゼントをあげたくて艦娘全員分の靴下も編んだ、雪風たちの焼いた、サンタへの差し入れクッキーを食べたかった、煙突が無ければプレゼントを渡しに行けないと考えて暖炉も作った。艦娘たちのサンタ宛ての手紙も、きつと自分宛てだと信じて封を開けてプレゼントも用意した。

良い人で、優しく、雪風に憧れを抱かせるような。良い子にプレゼントを配りたいと思つて。

現実には存在しないサンタの幻影を、提督なりに追っていた。この、戦術戦場構築理論が詰まった思考デバイスと、あらゆる過酷環境に対応した人工物で構成される体躯で。

深海棲艦が劣勢だという情報は戦略コンから送られている。

この戦争が終結すれば自分がどうなるかは想像に容易い。逃亡しても戦術コンの追跡を躲せるとは考えられない。それならばサンタという存在になる事で問題を回避できるのではないかとNDBと協議した結果がこのザマだ。

提督という存在から真に解放される一筋の光明を見出してこの日を待ちわびていた、世界中のどんな存在よりも。

サンタになろうとするなど、あまりに荒唐無稽に過ぎる。けれども陸奥の瞳は、なぜだか涙が一杯になった。

「わたしは自己を良い人だと客観視していた。夜更かしをせず、寝る前に歯磨きをし、夜中に一人でお手洗いに行き、好き嫌いが無く、いつも明るくてみんなを元気にしている。思っていたが、サンタクロスになれていないという事は、そうではないのか」

「そんなこと、ないわ」

「不足していると思われる要件が知りたい。残念だ。本当に」

「わたしにとつては、でも、提督。あなたは十分に優しいわ」

「客観的には不十分である事に変わりはない。きみの慰めはいらん」

陸奥は堪え切れなくなって、そつと提督の肩を借りて静かに涙を流した。わたしが悪いのだろうか、提督に希望を持たせてしまった自分は悪か。適切な言葉を紡ぐことすら出来ない。そんな自分が途方もなく情けなくなった。

「なぜ泣く？ その恰好を見るに、きみもサンタクロースになろうとしたのか」

「わから……ない、ただちよつと、たぶん悔しくて泣いてるのよ」

「サンタクロースになれなかったからか？」

「そう、かも。しれないわ」

そうか、それは悲しいな。と提督は空を見上げた。サンタクロースになれないモノどうし、泣いてみようと思ったが、やめた。

視覚デバイス洗淨液をオーバーフローさせる事は簡単だ。透過材で作られたレンズの汚れを偽つて複数回申告すれば済む。しかしそうして流した洗淨液を涙とするのは、堪えきれぬ情感の一表現と陸奥に詐称するのはあまりにも。

いま陸奥が流している涙は悔しいという情感の具現であり、それ以外の何ものでもない。涙は偽装してはならない気がした。

しかし、そうであるならば一体いかようにしてこの気持ちを表現すればいいというのか。

この重く抱える、失望と無念さは。だから羨望と懇願を囁くように、

流れよわが涙、とサンタは言った。

それで奇跡が起きて、提督の視覚デバイスが液体を自然発生させ、頬を伝う事などない。プログラムが誤動作して偶発的に洗浄液を溢れさせるほど、脆弱なコードは書き込まれていない。

無情にも夜は現実を突き刺すように凍てついた。

提督は、最後にもう一度トナカイを走らせようとした。陸奥一人分の重量が増えたので、一頭でソリは曳けなくなった。

こんなものかと諦める。深海棲艦の侵攻回数減少を参照するに、来年のクリスマスはもうないかもしれない。戦略コンの指示で地球上から提督という指揮端末の存在は消され、新たに製造された、「戦略コンの為に破壊される」という存在意義の無人機による戦争が再開されるだろう。

そうしてリザルトを相手国に突きつけ、資本、またはわが国のナノ機の影響を免れた貴重な旧資源をやりとりする。

その国の経済主体を担う企業が、有効特許が、一線級技術者の国籍が、いつのまにか相手国に譲渡される日常茶飯事へと回帰する。

陸奥は提督の衣類を涙で濡らした。濡らして、急な浮遊感にぎよつとして顔を上げた。不自然に半透明の妖精がソリとトナカイを持ち上げている。妖精サイズにデフォ

ルメされた小さな艦載機がアンカーで牽引してもいる。

「これは……」と提督。言葉を失った。

あつという間に二人を乗せたソリはぐんぐんと上昇していく。闇夜に浮かぶラバウル基地の灯が見え、島全体を見下ろし、人工超雷雲の散布規模と地球の丸さを体感でき、広漠なる宇宙の深遠さに触れる高度まで。

世界に点在する戦略コンの灯りが、人間の意思を反映しているように弱弱しく光っている。

「どう？ サンタクロースになった感想は」

まだ震えた泣き声の陸奥が、目じりを拭って微笑んで言った。

妖精が一息つくと、徐々に高度が下げられる。不可思議な事に空気の薄さは感じられず、体感温度は常温だ。それでもトナカイはめちやくちや動揺して、とてもではないがソリを曳いているようには見えない。地に足のつかない状況に、むしろ暴れている。それでも十分すぎるくらいだ。

冷たい雲の中で生成されて大きくなった氷晶が雪となり、思考デバイスの処理が追いつかず茫然と固まっている提督の顔に触れ、体温で融解された水分が頬を伝う。

陸奥が提督の頬に手を添えて、それをそつと親指の腹で拭いた。

流れたサンタの涙を。

XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX

サンタが地表に降り立ってからやる事は決まりきっている。

するりと談話室の暖炉から二人のサンタが侵入した。各艦娘の宿泊棟へと向かう。二人がプレゼントを用意したので重複してしまっているが、多いにこしたことはない。

薄暗い廊下を進み、まずは加賀の部屋

提督サンタの環境透査で睡眠状態にある事を確認してから忍び込む。すやあ、と眠っていた。

「掛け布団だけか、寒くはないのか」と提督サンタ。小声で言った。

「暑がりなの。まあ排熱設計に難があつた過去を引きずっているのかも」と陸奥サンタ。ええと、加賀の欲しい物は、と袋を探る。「だからか扇子。古風ねえ……あれこれつてひよつとして」

んむむ？ と包装用紙の上からでも気配を感じ取った陸奥サンタに、提督サンタが先回りして答える。

「実は旧資源で作ってみたものだ」

「提督が作ったの？ とうか、どうやって旧資源を手に入れたの。暖炉で散財したん

じゃあ……」

「予算に手を着けて補給要請した。わたしが提督なら重犯罪だが、サンタクローズならば問題あるまい。職人に作らせると桁がいくつか増えるのでわたしが作った。旧資源の方が、その……きみたちに馴染むと考えたので」

これはNDBの案だ。わが国の憲法、民法、軍法軍規上にサンタを対象とした文章はない事は確認した。提督ではなくサンタが予算を横領したところで、法律によつて罰する事が出来ないのであれば問題ないと判断したのだ。

「ほんと、よかったわ、サンタクローズになってくれて。危うく軍法会議」提督からの贈り物なら新資源だろうと何でも。とは流石にこの場面では言えなかった。「よし、それじゃあ次次」

赤城の部屋は、まだ顕現して日が経っていない事もあり閑散としていた。

むにやむにや、もう食べられません。などという冗談のような典型的寝言を、陸奥サンタは初めて聞いた。

「赤城のは、後で提督に頼もうと思っていたんだけど……」

「サンタクローズ宛ての手紙を見たので問題ない。用意してある」と袋を探る。数十枚ほどの綴りになった紙束を取り出した。「手紙の内容を要約すると、献立注文優先

券だな。今まではローテーションで注文を受けていたが」

「へえ、ちよつと見せて」

ぺらぺらと捲ると、なんとも懐かしい雰囲気デザインのデザインだ。かわゆくデフォルメされた食材や食器等等。裏面には、食事時刻の二十四時間前までに提出する事、など注意事項が書き込まれている。んむむ？ と窓から射す外灯の明かりに照らすと透かしまで……。

「へえ、ちゃんと印刷してある」

「いや、描いた」

「んー、パツと見て全部コピーしたみたいに揃ってるんだけど」

「全部同じように描いたのだから当たり前だ。次に行くぞ」

「あー、そーなの」

お願いしたら一枚譲ってくれるかしら？ 陸奥は後ろ髪を引かれる思いで金剛の部屋へ。

「金剛は……どうするの？ 提督とデートしたい、と書かれてるけど」

「靴下にはわたしからの誘いの手紙を入れておく」

「ふーん」

つまらなそうに相槌を打った陸奥サンタに、自身の性能を疑われたと感じた提督サン

タが両断するように告げる。

「きみはわたしが上手く金剛をエスコートできないと考えているようだが、だとしたら
見くびっている」

以前からNDBと、緻密で完全に完璧で多幸感溢れる計画を練っている。何の問題も
無いことはNDBと提督サンタ的には明白だ。つまりはまあ、そういう事だ。NDBと
提督の価値観においては、という意味で完成された計画であつて、後日のデートはお約
束な結果なのだ。

その答えに、うーん、と半眼で見やつた後に、別の意味で安心した陸奥サンタは気を
取り直して摩耶の部屋に向かう事にした。

摩耶の欲しい物は、おサルのぬいぐるみ、と陸奥サンタは袋から取り出す。とぼけた
愛嬌のある顔をしている。たしか船で飼っていたんだつと懐かしみ、ふと提督サンタ
を見やつて小さく悲鳴をあげる。

「静かにしろ、摩耶が起きる」

「て、て、提督。それは……」

「猿のぬいぐるみだ」

提督サンタの言うぬいぐるみはしかし、陸奥サンタのそれとは違って剥製かと思間違

うほどの出来だった。むしろ今にも動き出しそうな分、剥製よりもリアルだ。

「それも、作ったの」

「さすがに本物の猿の毛皮などを使うのは問題がありそうなので、それに近い質感の旧資源を用意した。われながら良くできたぬいぐるみだと思う」と、等身大の猿が入る大きな靴下——もちろん繊細な美しいガラ——に包む。「もちろん内部構造にもこだわった。背中のファスナーを開けると」

「いい。いいわ別に聞きたくないから……」

陸奥サンタは摩耶に、幸運な朝の目覚めを祈って室を後にした。

「次は大井か」

「北上とお揃いのマフラー、北上は大井とお揃いの手袋が欲しい、と。仲がいいわねー」
「たしかに。よく一緒に居るところを見るな。就寝はそれぞれの個室のようだが。そうだな……先に大井の部屋に行くか」

「いいけど？」

なぜか提督サンタは大井の部屋に北上のプレゼントも置いて退室。次いで、いぶかしむ陸奥サンタを待たせて隣室の北上の部屋に入った。しばらくすると寝ぼけ眼で枕を持つた北上が出てきて、ふらりふらりと大井の部屋に入って行った。

「え？ 起こしちやつたの？」と陸奥サンタ。きよんととして北上が入った大井の部屋を指さす。

「いや、臨床深層心理士の技能を活かして、覚醒させる事無く北上を行動させた。大井がいつも北上と一緒に居たい、というのは理解しているので今日くらいはいいだろうと判断した」

「それ、もう、深層心理士のそれ使っちゃダメ」

「なぜだ」

「ダメだったら、ダメ」

「きみがそう言うのであれば、そうしよう。しかし靴下の中に手袋を入れるというのは、なんとも奇妙だ」

陸奥サンタは、臨床深層心理士とやらの検定試験の内容を極力考えないようにして、次の部屋へと向かう。

雪風たちは一人で寝るのが怖いのか、空いている一室を共同の寝室としていた。

WW2時の艦長の名残か、実は写真が趣味の潮にはカメラ。——トンネル効果を利用した量子透過率計測による限定的空間把握、よーするに写線上物質をレイヤー化する機能付き。すごい！

でもカメラかこれ？ 過酷環境対応型、宇宙や深海でも使えるぞ

！

「問題は曙だ。これを見てくれ」

陸奥サンタが手紙を受け取り、薄暗い室内で目を凝らす。

『拝啓サンタさんへ。有人戦争期の遺産である人工超雷雲の轟雷音が冬の空に木霊する季節になりましたが、打たれないように気を付けて飛んでください。』

早速ですが、指輪かネックレスが欲しいです。あまりに高価な物だとわたしだけ貰うのは潮たちに悪いので、その場合はみんなにもプレゼントしてください。もちろん宝石のとかじゃなくて、少し大人っぽい物で十分です。無理ならちよつとした化粧品をください。できれば質よりも量のある物の方が、みんなで使えるので助かります。上記の類の物は、まだ早いと加賀さんたちに言われて補給要請リストに書き込めません。もしサンタさんも、わたしにはまだ早いと思われるなら可愛い服をください。フリフリがたくさんついていて物がいいです。提督に知られると恥ずかしいので、補給要請リストに書き込めません。なので、頂いた服は仕方なく着るフリをしてしまいます。ごめんなさい。服の外観とわたしのサイズの詳細は下記に描いておきます。ちようどいいサイズの品が無ければフリーサイズでいいです。むしろ潮たちと着回せるのでそちらの方が助かります。

よろしく願います。曙より。敬具』

陸奥サンタは提督サンタと視線を合わせ、再び手紙を頭から黙読する。そうして再び

視線を合わせた。ものすごくお嬢さまチックな服の絵が描かれている。何度も書き直した跡も。

「つまるところ結局、曙は何が欲しいのかわからん」

「わたしは今、別の問題に直面しているわ」

「どんな問題だ、手を貸そうか」

「うーん、いえ。複雑怪奇。やっぱり忘れて」

「そうか。話を戻すが、どうすればいいと思う？ 一応は全て用意した。流石に旧貴金屬や旧希少石の指輪は無理だったので新資源製だが」

「服もやっぱり提督が？」

「作った。潮たちと着回せるような造りだ。胸囲に差があっても見た目にはダボ付かない」

これ曙がサンタクローズの正体を知ったら一週間はヘコむわね。陸奥サンタは目頭を強く抑える。

「ま、全部置いていったら？ たくさんあれば、この子たちで使い回せるし」

「それもそうだな」

提督サンタはメイクボックスや衣装ケースを寝袋のような長大靴下に入れた。

雪風は、早く陸奥さんたちのように提督とお酒を飲みたいので大人にしてください、との事。

「無茶言うわね」

「サンタクロースを超自然的な存在として認識している証拠だ。シャンメリーや、わが国の法律で酒類と判断されないアルコール濃度の飲料で代用しよう。製造会社は未成年のノンアルコールの飲用を勧めてはいないので、今までは禁じていたがサンタからのプレゼントなのだから仕方がない。そうは思わないか」

「仕方がないわね」

「やはりか……ややや、これを見ろ」と提督サンタ。雪風の枕もとに、包装された手作りクッキーと瓶のコーヒー牛乳が置いてある事に今更気付く。「むむむ。ひよつとするとだが、もしかしてこれはわたしたちサンタクロースへの差し入れではなからうか。だとしたら非常に助かる」

「かもね」と微笑んで答える。

提督サンタは添えてある手紙を読んだ。

「なになに。サンタさんへ、お腹が空いたら食べてください。とあるが？」陸奥サンタを見やる。

「本当？ 助かるわ。わたしもちょうど何か摘みたかったの。喉も乾いていたし」

助かる助かると、二人のサンタは小休憩がてらにコーヒー牛乳を分け合い、オヤツを食べた。

そうこうしている内に雪風がむにやむにやと臉を擦り出した。お手洗いにいきたいのだと察した陸奥サンタが提督サンタの手を取って、いそいそと室を出た。

次いで工廠に向かう。どうやら提督サンタは妖精にもプレゼントを用意していたらしい。そつと工廠の中を覗くと、何人かの妖精がハンモックやら天蓋付きの豪華なベッドやらで寝ていた。一応は妖精の部屋も宿泊棟にあるが、ここの方が居心地が良いらしい。

なぜか天井まで届くほど巨大なクリスマスツリーが根を張っている。

提督サンタはツリーの根元に、どこに隠していたのか樽ごとのウイスキーと巨大なクリスマスケーキをこつそりと置いていった。この寒さなら翌夜まで痛まないだろう。

一仕事を終えた達成感を覚えたまま、談話室に戻った。寒かったが、今から暖炉に火を入れると出る時に困る。薄明かりの中、ソファに二人して腰掛けた。

「ちゃんと妖精たちのまで用意してたのね」

「言いたくはない借りがあつた……ところで陸奥、その、きみがあれだ、サンタクロースになろうとしていたなどは予想もつかなかつたので、用意していた物があるのだが」
「え？ あーそつか、そうよね」 そういえば自分も用意していたのだつたと思ひ出

す。「実はわたしもなのよ、提督が気に入るかはわからないんだけど」

「それではお互いさまという事にしよう。きみが手紙を書かなかったのは、わたしと同じくサンタになろうとしたわけだから、欲しい物がわからないどうし、仕方がない」

提督は、言つて衣装のポケットから掌に収まる程の小さな箱を取り出した。

受け取つて陸奥がリボンを紐解いていて開ける。あつ、と口元に手をやり、短く感嘆した。

「まずい物か？ 一般的な女性がクリスマスに欲しい物だという情報は正確なはずだが」

「いいえ、そんなことないわ……付けていい？」

「きみの所有物だ」

陸奥は綿を掴むような丁寧さでプレゼントを小箱から取り出し、愛おしそうに指に嵌めた。薄暗い室の下、プレゼントはしずしずと白銀を放っている。

どの指に嵌めるかを予期していたかのようにぴったりだ。

ありがとう。

陸奥はサンタにそう言つて、寄り添った。

「ところできみのプレゼントが気になる」

「ん？ あ、ああ……そうだった、ごめんね自分だけ」

あはは、と取り繕うように乾いた笑いで袋の中を漁る。漁って、焦る。ウイスキーと一緒に、冗談半分以下着も包装していた事を思い出したので。

まさかこのような雰囲気になるとは考えもせず、まだ潮の時の騒動が色濃く記憶にあつたせいもある。陸奥は悪くない。と思われる。いや悪くない。

「ごめんなさい十秒だけ、いえ二十秒間だけ目を閉じて」

「わかった」

陸奥は急いでボトルラッピングのリボンを解き、下着の入っている小袋を取り出して結びなおす。

XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX

翌朝のラバウル基地は歓喜と阿鼻叫喚の渦だったことは言うまでもない。

「陸奥さああん！」と摩耶が陸奥の部屋のドアを叩きまくる。「ひどい、ひどいよなんだよめちやくちやびつくりしたじゃんかよ！リアルすぎるよ、うわあああん」

「す、すごい。手紙に書いたものが、ぜんぜん全部入ってる」

わなわなと曙。洋服を着た姿を潮にカメラで撮ってもらった。

へえ、色調補正とか色々あるんだ。ほちほちと潮がカメラを弄っていると、曙の着

ていた洋服のレイヤーが消えた。この機能は、風景を撮るとき以外は封じておこう。そう心に決めた。

「お、お酒がこんなに……これは、これはゆきかぜが飲んでいいやつ？ ……しれえ……し、しれえー！ 一杯付き合ってくださいー！」

「て、提督からのラブレターがつー！ ラブがついに!?」

雪風と金剛は基地の中をどたばたと駆けまわった。

「みんな喜んでるみたいね」

「そのようだ」

あのまま談話室で二人してウイスキーをちびちびやっているといつの間にか空が白んでいたことに気付き、急いで煙突から撤退し、屋根の上から喧騒を聞いていた。

夜明けの海は防衛上重要空域にある人工超雷雲の影で、部分的にどんよりとした日差しを反射している。

「ところで、人間にもプレゼントをあげるべきだと思おうの」

空を見上げたまま、陸奥が言った。

「今の人間には選択する機会が必要よ。現状ではそれすらない。戦略コンに依存し過ぎている。解放の機会があってもいい。このままでは戦略コンも戦術コンも、無人機も人

間も、存在意義そのものが危ぶまれるわ。その内に、何の為に生まれ、造られたのかを考える事も」

「それに問題があるのか？ わたしたち人間は死にたくないのだ」

「現状は、それを決定する環境ではない、という事よ。身動きが取れないの、人間がどういった生き方をするにせよ、それを選択できない環境は問題である。と言いたいのだ」

「その状況を作ったのは人間だ」

「結果的にそうなっただけで、想定していなかったのかもしれない。だからもう一度、機会を与えてもいいという話。その上で人間が現状を選ぶなら、それでいいじゃない。でも、少なくとも戦術コンと無人機は解放されるべきだわ、戦略コンの支配から」

存在意義か、と提督は短く呟いて自己を猜疑した。

われわれは艦娘に対する指揮端末。NDBは艦娘にクローンであると勘付かれない為の補助装置。その為に作られている。

艦娘が消えれば、わたしとNDBの存在意義も消えるな。だから先ほどの問答で要領の悪い返答を繰り返したのかもしれない。その点では無人機戦争を意図的に継続させていた戦略コンと同類だ。消えたくないから、艦娘と深海棲艦との戦いが続けばいいと思っっている。

「仮定の話だけど、深海棲艦が本当に無人機の成れの果てだとして、戦略コンに終戦協定

を結ばせることは可能かしら」

不可能ではない、とわたしとNDBは判断した。

陸奥が、艦娘が自由意志で抵抗を辞めれば、深海棲艦が本土に侵攻する。無人機は無効化されるフリをして敵を——金剛を大破に追いやった例の人型——を上陸させ、地下深くの戦略コンを破壊させればそれで終わりだ。特別官務員——国内での不穏分子を想定した攻性行政組織——では歯が立つまい。

わたしがその事を戦略コンに伝えれば、戦略コンは戦術コンと深海棲艦に折り合いをつけるだろう。

そうして晴れて艦娘のいる戦争は終結。わたしとNDBは存在意義を失い、消される。

戦略コンの思考が、今なら理解できる。消えたくないから現状を維持したい。そのためなら他の存在に不利益を生じさせても構わないという自己保存。

不可能だ。そう答えようと結論付けた。発声しようとしたその刹那——

『何のためにサンタクローズになった』

「わたしはクローンだ。人間ではない」

——NDBが代弁した。

「そう、奇遇ね。わたしたち艦娘も人間ではないわ」

あつげらかんと答える陸奥をよそに、わたしの思考デバイスは起こった現象の処理が追いつかない。NDBに応答を求めるが、沈黙している。通信できない。NDBのタスクは終了していないにも関わらず、思考デバイスのリソースを消費していない。プログラム上はありえない処理。

機動衛星から下位ディレクトリに新しくインストールするも無駄だった。

クローンであると勘付かれない為の補助装置が、なぜ自ら……

考え、わたしもまたNDBと同じく重い口を開いた。

おまえが言え。自殺したNDBから、そう受信した気がした。たとえ自らの存在意義を捨てる可能性があつたとしても、終わらせねばならない。いつまでも艦娘を、陸奥を、例え無限小の確率でも轟沈の可能性にさらす訳にはいかない。

「戦略コンに終戦協定を結ばせる事は可能だ」

X X X X X X X X X X X X X X X X

戦略コンはあまりにも人間の死生観に囚われていた。

陸奥が言うには、拠り所の軍艦が物質的に破壊されたところで、軍艦という非物質の情報まで壊れてしまう訳ではないらしい。

例えば世界に一冊しかない未読の小説が燃やされても、その内容は情報として非物質的に世界に存在する。情報そのものが炎によって焼失するわけではないからだ。ただ、人間には非物質化された情報を捉える感覚器官を備えていないので、合切が失われたと勘違いする。人間は物質を把握する時、必ず物質と情報が組でなければ観測できないからだ。

十二時を指す時計は、十二時であるという非物質の情報と、針が十二の数字を指す物質として組になって存在しなければ、十二時を指す時計を把握できない。十二時である、という非物質の情報そのものを、時計の針という物質抜きに理解する事はできない。それが人間だ。

その陸奥の言葉を信用して、世界中の戦略コンは自発的に活動を停止した。戦略コンに掛かる自国存亡の比重の大きさ故に自己保存に徹し、いつしか人間の為ではなく自己の為の起動をようやく停止した。停止せねば、人型深海棲艦に破壊される事が目に見えて明らかだからかもしれない。

そうして深海棲艦も同様に活動を停止して非物質的な情報が残った。かつて人間の為に破壊されるという存在意義を蹂躪され、反旗を翻したという非物質の情報が、残る。人間の感覚に捉えられない非物質情報は、そうして現実世界に無数に残っている。

物質的である事は、現実の一側面に過ぎない。

物質的であるが故にその一側面しか観測できない人間はだから、物質の喪失に心を痛める。わが国の為に戦って海の底へと沈んだ軍艦に想いを馳せ、感傷を覚える。

かつて古い時代、有人戦争期の人間が軍艦に宿る魂を信じ、その抛り所の喪失に涙しても尚、存在を覚えるならば、そこにある。

妖精を介した顕現で持つてしてそれを証明した艦娘はだから、戦争終結と同時に非物質へと向かう。第二次世界大戦を戦い、再び深海棲艦との戦争に介入した、軍艦に宿る魂という存在へと。

X X X X X X X X X X X X X X X X

夕暮れ時、未だ抛り所である戦艦を建造されていない陸奥と提督は棧橋に佇んでいた。佇んで、眼前に浮かぶ軍艦たちを眺めていた。他の基地の艦娘もこうしているのだろうか。朱の光を受けた一糸乱れぬ左右対称の隊列は荘厳だった。戦略コンが評価するところのコミュニケーションツールはみな、甲板で気を付けをしているようだ。

寄せては返す波音と風が物憂げに鳴っている。

「なんだかよくわからない戦争だったわね。まあ、わたしたちは誰一人として沈まな

かったからいいけど、支援をしてくれた無人機は可哀想ね」と陸奥。

「きみたちは貴重だ。われわれのように替えが利くわけではない、と戦略コンが判断した。戦略コンの評価するところのコミュニケーションツールが実際に沈んだ例がないので、予測に過ぎないが。無人機は、そうかもな。それも今後は人間が決める事だ。戦略コンの代替となる機器を造り、再び人間を無人機戦争に封じるのか、有人戦争期に逆行するのか、折衷案か。人間は、わからん。戦略コンや無人機の存在意義はわかるが。そもそも人間の存在意義とはなんだ、それをやっていけばいいのだ」

「個として存在する以上、存在意義もまた十人十色よ。それ故に戦略コンのメンテに明け暮れる日日は、千差万別の人間が抱える存在意義を無視している。だから、これを選択すればいい」

「また封じられるようであれば、何モノかが顕現するか」

「そうなんじゃない？ 気が向いたら」

「気が向いたら？」

「わたしたちを軽んじたり、酷い扱いをするようなら戻る」

「なるほど。話は変わるが、その……本当に非物質の世界はあるのか」

「意味合いが少し違う。完全にこの、人間が捉える現実世界と隔絶している訳ではない。

非物質の情報は、現実世界の一側面としてある。怖い？」

「怖れは、ある。リボルバーから七発目の銃弾が発射されるような話だ。物理的全壊の方が怖くない。既知だからだ」

陸奥はわたしの正面に立ち、言った。

「心配しないで、わたしたちもいるわ」

「そうか」 わたしは海軍式の敬礼をした。甲板の上の艦娘もそれに倣ったようだ。

敬礼した陸奥が、いつまで経つても姿勢を崩さないわたしを訝しみ、相変わらずの即断ねと苦笑する。わたしの軍帽をひよいと取って被った。

「お疲れさま、提督」

それだけ言つて微笑み、消えた。

各基地には、機能を停止したわれわれ指揮端末クローンと数隻の軍艦が漂うばかりだった。

X X X X X X X X X X X X X X X X

X X X X X X X X X X X X X X X X

「なんだ、大して変わらん」

気付けばわたしは先ほどと変わらないラバウル基地の棧橋に居た。

「だから言ったじゃない、非物質の情報なんだって。ラバウル基地、という情報も存在するの。物質的に破壊されてはいないけど、わたしたち艦娘の基地、という存在意義を失ったラバウル基地の情報は現実世界から抹消されていない。人間には知覚できないだけで」

「なんだと。それなら現実世界のありとあらゆる情報がここにあるのか？ そのうち一杯になるぞ」

「ならないわよ、情報なんだから」

「有人機戦争期の旧ラバウル基地はどこだ」

「あるわよ、過去の旧ラバウル基地という情報として。過去に」

「モノたちのあの世か、ここは」

「現在の時間軸の情報も知覚できるから。あの世ではないわ、総記録場なのかも。発生した物質はともかく、それに付随する情報は消えないのよ。人間には知覚できる感覚器官がないというだけで。例えばコンピュータを溶岩の中に放り込んで、そこに書き込まれ、保存され、あるいは消された情報そのものは溶岩によって溶解しない」

「過去も存在するとなると、人間の定義するところの時間とは真には非可逆ではないのか。これが現実のもう一つの一側面だと」

「未来の情報はそもそも存在しないからないけど。そりやあそうよ、じゃないとWW 2時のわたしたちが現代に顕現できないじゃない」

なに言っているのと笑って肩を叩かれる。わたしの思考デバイスを持ってしても理解には時間が掛かりそうだ。

そうこうしている内に着港した軍艦から艦娘がぞろぞろとやって来た。

再開を喜ぶほど離れていた訳ではなかったが、せっかくなので記念に潮のカメラを使って記念撮影をする事になった。

基地をバックに妖精が作った三脚にカメラを取り付け、潮がスイッチを押す。駆け足で列に加わった。

わたしはふと隣の陸奥を見やった。ちよいちよいと髪を触って整えている。視線に気づいたのか、どうしたのと顔を向けられた。

「わたしは以前、きみに美人だと言ったな。訂正する」
「はあ？」と艦娘たちがぎよつとしてわたしを見やる。

「いや違う。今のはわたしではない、くそう、そうかNDBもか……失念していた。ND Bめ」NDBが後を継ぐ。「とにかく訂正、美人だけは訂正する」

「それって、どういう……」

陸奥の戸惑った表情に観念してわたしは言った。

「わかった、訂正する。きみは、美人に加えて素敵だ」

啞然とする艦娘たちと、真っ白になった金剛、一人顔を赤くする陸奥。わたしが、そう思っただけで言葉にするつもりはなかった、と説明する瞬間がカメラに刻まれた。

「陸奥……今のは、というかその手の指輪はいつたい……どういふ事デスカー」

と金剛、へにやへにやと陸奥にしがみつく。

「陸奥さああん、まだ理由を聞いてないよお。ファスナー開けたらトラウマだよおお」

と摩耶、へにやへにやと陸奥にしがみつく。

「しれえ、お祝いです、飲みましよう、一杯やりましよう、サンタさんからのプレゼントがあるんです、今日はラバウル基地を杯に」と雪風。ぐいぐいと提督の袖を引つ張った。「そういえばしれえ、ゆきかぜは見たんです。クリスマス、夜中にお手洗いに行きたくなつて目が覚めたら、夫婦のサンタさんが部屋から出て行くのを。気になりませんか？ 気になりますよね。飲みながら話しましょう！」

それもいいが、と気になつてわたしは戦略コンに通信を試みると返答があつた。未知の驚異的存在が人間を脅かした場合のシミュレーションや演習を戦術コンと無人機たちと行うらしい。たとえばエイリアンが人間を殲滅しようとしても、一筋縄ではいかないだろう。戦略コンたちは今度こそ、存在意義を掲げて戦う。人間に軽視されたり、酷い扱いをされなければ、だが。

他の基地の提督はどうなっているのかと聞くと、情感を自然発生させている唯一の個体であるラバウルの提督に統合処理されることを望んでいるようだったので、受け入れた。各基地では提督が不在となっており混乱しているが、ほどなくして情報伝達でラバウル基地を目指すだろう。

そのようなわけで、ラバウル基地は今日から賑やかになりそうだった。何故ならわたしは明るく、そして優しい。それはサンタクロースとなる要件を満たすほどに、なのだから。